陽炎座

泉鏡花

一

「ここだ、この音なんだよ。」
帽子（あたま）も靴も艶々（てらてら）と光る、三十ばかりの、しかるべき会社か銀行で当時若手の利（き）けものといった風采（ふう）。一ツ、容子（ようす）は似つかわしく外国語で行こう、ヤングゼントルマンというのが、その同伴（つれ）の、――すらりとして派手に鮮麗（あざやか）な中に、扱帯（しごき）の結んだ端、羽織の裏、褄（つま）はずれ、目立たないで、ちらちらと春風にちらめく処々（ところどころ）に薄（うっす）りと蔭がさす、何か、もの思（おもい）か、悩（なやみ）が身にありそうな、ぱっと咲いて浅く重（かさな）る花片（はなびら）に、曇（くもり）のある趣に

似たが、風情は勝る、花の香はその隈（くま）から、幽（かすか）に、行違（ゆきちが）う人を誘うて時めく。薫（かおり）を籠（こ）めて、藤、菖蒲（あやめ）、色の調う一枚小袖（こそで）、長襦袢（ながじゅばん）。そのいずれも彩糸（いろいと）は使わないで、ひとえに浅みどりの柳の葉を、針で運んで縫ったように、姿を通して涼しさの靡（なび）くと同時に、袖にも褄にもすらすらと寂しの添った、痩（や）せぎすな美しい女（ひと）に、――今のを、卜言掛けると、婦人（おんな）は黙って頷（うなず）いた。が、もう打頷く咽喉（のど）の影が、半襟の縫の薄紅梅（うすこうばい）に白く映る。……

あれ見よ。この美しい女（ひと）は、その膚（はだえ）、その簪（かんざし）、その指環（ゆびわ）の玉も、とする端々透通（すきとお）って色に出る、心の影

がほのめくらしい。

「ここだ、この音なんだよ。」

婦人(おんな)は同伴(つれ)の男にそう言われて、時に頷いたが、傍(かたわら)でこれを見た松崎と云う、絣(かすり)の羽織で、鳥打を被(かぶ)った男も、共に心に頷いたのである。

「成程これだろう。」

但し、松崎は、男女(なんにょ)、その二人の道ずれでも何でもない。当日ただ一人で、亀井戸(かめいど)へ詣(もう)でた帰途(かえり)であった。

住居(すまい)は本郷。

江東橋(こうとうばし)から電車に乗ろうと、水のぬるんだ、草萌(くさもえ)の川通りを陽炎(かげろう)に縺(もつ)れて来て、長崎橋を入江町に掛(かか)る頃

から、どこともなく、遠くで鳴物の音が聞えはじめた。松崎は、橋の上に、欄干に凭（もた）れて、しばらく彳（たたず）んで聞入ったほどである。

ちゃんちきちき面白そうに囃（はや）すかと思うと、急に修羅太鼓（しゅらだいこ）を摺鉦交（すりがねまじ）り、どどんじゃじゃんと鳴らす。亀井戸寄りの町中（まちなか）で、屋台に山形の段々染（だんだらぞめ）、錣頭巾（しころずきん）で、いろはを揃えた、義士が打入りの石版絵を張廻わして、よぼよぼの飴屋（あめや）の爺様（じさま）が、皺（しわ）くたのまくり手で、人寄せにその鉦（かね）太鼓を敲（たた）いていたのを、ちっと前（さき）に見た身にも、珍らしく響いて、気をそそられ、胸が騒ぐ、ばったりまた激しいのが静まると、ツンツンテンレン、ツ

ンツンテンレン、悠々とした糸が聞えて、……本所駅へ、がたくた引込む、石炭を積んだ大八車の通るのさえ、馬士は銜煙管で、しゃんしゃんと轡が揺れそうな合方となる。

　絶えず続いて、音色は替っても、囃子は留まらず、行交う船脚は水に流れ、蜘蛛手に、角ぐむ蘆の根を潜って、消えるかとすれば、ふわふわと浮く。浮けば蝶の羽の上になり下になり、陽炎に乗って揺れながら近づいて、日当の橋の暖い袂にまつわって、ちゃんちき、などと浮かれながら、人の背中を、トンと一つ軽く叩いて、すいと退いて、

——おいで、おいで——

と招いていそうで。

手に取れそうな近い音。

はっ、とその手を出すほどの心になると、橋むこうの、屋根を、ひょいひょいと手踊り雀、電信柱に下向きの傾(かたが)り燕、一羽気まぐれに浮いた鷗(かもめ)が、どこかの手飼いの鶯(うぐいす)交りに、音を捕うる人心(ひとごころ)を、はッと同音に笑いでもする気勢(けはい)。

春たけて、日遅く、本所は塵(ちり)の上に、水に浮(うか)んだ島かとばかり、都を離れて静(しずか)であった。

屋根の埃(ほこり)も紫雲英(げんげ)の紅(くれない)、朧(おぼろ)のような汽車が過(よ)ぎ

る。
その響きにも消えなかった。

二

松崎は、――汽車の轟(とどろ)きの下にも埋れず、何等か妨げ遮るものがあれば、音となく響きとなく、飜然(ひらり)と軽く体を躱(か)わす、形のない、思いのままに勝手な音(ね)の湧出(わきい)ずる、空を舞繞(まいめぐ)る鼓に翼あるものらしい、その打囃(うちはや)す鳴物が、――向って、斜違(すじかい)の角を広々と黒塀で取廻わした片隅に、低い樹立(こだち)の松を洩(も)れて、朱塗(しゅぬり)の堂

の屋根が見える、稲荷様（いなりさま）と聞いた、境内に、何か催しがある……その音であろうと思った。
　けれども、欄干に乗出して、も一つ橋越しに透かして見ると、門は寝静（ねしずま）ったように鎖（とざ）してあった。
　いつの間にか、トチトチトン、のんきらしい響（ひびき）に乗って、駅と書いた本所停車場（ステイション）の建札も、駅（うまや）と読んで、白日、菜の花を視（なが）むる心地。真赤（まっか）な達磨（だるま）が逆斛斗（さかとんぼ）を打った、忙がしい世の麵麭（パン）屋（や）の看板さえ、遠い鎮守の鳥居めく、田圃道（たんぼみち）でも通る思いで、江東橋の停留所に着く。
　空（あ）いた電車が五台ばかり、燕が行抜けそうにがらん

としていた。

乗るわ、降りるわ、混合（こみあ）う人数（にんず）の崩るるごとき火水の戦場往来の兵（つわもの）には、余り透いて、相撲最中の回向院（えこういん）が野原にでもなったような電車の体（てい）に、いささか拍子抜けの形で、お望み次第のどれにしようと、大分歩行（ある）き廻った草臥（くたびれ）も交って、松崎はトボンと立つ。例の音は地（じ）の底から、草の蒸さるるごとく、色に出（い）で萌（も）えて留まらぬ。

「狸囃子（たぬきばやし）と云うんだよ、昔から本所の名物さ。」

「あら、嘘ばっかり。」

ちょうどそこに、美しい女（ひと）と、その若紳士が居合わ

せて、こう言（ことば）を交わしたのを松崎は聞取った。

さては空音（そらね）ではないらしい。

若紳士が言ったのは、例の、おいてけ堀、片葉の蘆（あし）、足洗い屋敷、埋蔵（うめぐら）の溝（どぶ）、小豆婆（あずきばば）、送り提燈（ぢょうちん）とともに、土地の七不思議に数えられた、幻の音曲である。

言った方も戯（たわむれ）に、聞く女（ひと）も串戯（じょうだん）らしく打消したが、松崎は、かえって、うっかりしていた伝説（いいつたえ）を、夢のように思出した。

興ある事かな。

日は永し。

今宮辺の堂宮の絵馬を見て暮したという、隙（ひま）な医師（いしゃ）

と一般、仕事に悩んで持余(もてあま)した身体(からだ)なり、電車はいつでも乗れる。

となると、家へ帰るにはまだ早い。……どうやら、橋の上で聞いたよりは、ここへ来ると、同じ的の無い中(うち)にも、囃子の音が、間近に、判然(はっきり)したらしく思われる。一つは、その声の響くのは、自分ばかりでない事を確めたせいであろう。

その上、世を避けた仙人が碁(ご)を打つ響きでもなく、薄隠(すすきがく)れの女郎花(おみなえし)に露の音信(おとず)るる声でもない……音色(ねいろ)こそ違うが、見世(みせ)ものの囃子と同じく、気をそそって人を寄せる、鳴ものらしく思うから、傾く耳の誘わる

る、寂しい横町へ電車を離れた。

向って日南(ひなた)の、背後(うしろ)は水で、思いがけず一本の菖蒲(あやめ)が町に咲いた、と見た。……その美しい女(ひと)の影は、分れた背中にひやひやと染(し)む。……と、チャンチキ、チャンチキ、嘲(あざ)けるがごとくに囃す。……

がらがらと鳴って、電車が出る。突如として、どどん、じゃん、じゃん。——ぶらぶら歩行(ある)き出すと、ツンツンテンレン、ツンツンテンレン。

三

片側はどす黒い、水の淀（よど）んだ川に添い、がたがたと物置が並んで、米俵やら、筵（むしろ）やら、炭やら、薪（まき）やら、その中を蛇が這（は）うように、ちょろちょろと鼠が縫い行く。

　あの鼠が太鼓をたたいて、鼬（いたち）が笛を吹くのかと思った。……人通り全然（まるで）なし。

　片側は、右のその物置に、ただ戸障子を繋合（つなぎあ）わせた小家（こいえ）続き。で、一二軒、八百屋、駄菓子屋の店は見えたが、鴉（からす）も居（お）らなければ犬も居らぬ。縄暖簾（なわのれん）も居酒屋めく米屋の店に、コトンと音をさせて鶏が一羽歩（ある）行

いていたが、通りかかった松崎を見ると、高らかに一声鳴いた。

太陽（ひ）はたけなわに白い。

颯（さっ）と、のんびりした雲から落（おち）かかって、目に真蒼（まっさお）に映った、物置の中の竹屋の竹さえ、茂った山吹の葉に見えた。

町はそこから曲る。

と追分で路（みち）が替って、木曾街道へ差掛（さしかか）る……左右戸毎（まていえなみ）の軒行燈（のきあんどん）。

ここにも、そこにも、ふらふらと、春の日を中（うち）へ取って、白く点（ひとも）したらしく、真昼浮出て朦（もう）と明るい。いず

れも御泊り木賃宿（きちんやど）。

で、どの家も、軒より、屋根より、これが身上（しんしょう）、その昼行燈ばかりが目に着く。中（うち）には、廂先（ひさしさき）へ高々と燈籠（とうろう）のごとくに釣った、白看板の首を擡（もた）げて、屋台骨は地（つち）の上に獣（けもの）のごとく這ったのさえある。

吉野、高橋、清川、槙葉（まきは）。寝物語や、美濃（みの）、近江（おうみ）。

ここにあわれを留（とど）めたのは屋号にされた遊女達（おいらん）。……ちょっと柳が一本（ひともと）あれば滅びた白昼の廓（くるわ）に斉（ひと）しい。が、夜寒（よさむ）の代（しろ）に焼尽して、塚のしるしの小松もあらず……荒寥（こうりょう）として砂に人なき光景（ありさま）は、祭礼（まつり）の夜（よ）に地震して、土の下に埋れた町の、壁の肉も、柱の血も、そ

のまま一落の白髑髏（しゃれこうべ）と化し果てたる趣あり。絶壁の躑躅（つつじ）と見たは、崩れた壁に、ずたずたの襁褓（おむつ）のみ、猿曳（さるひき）が猿に着せるのであろう。生命（いのち）の搦（から）む桟橋（かけはし）から、危（あやう）く傾いた二階の廊下に、日も見ず、背後（うしろ）むきに鼠の布子（ぬのこ）の背（せな）を曲げた首の色の蒼（あお）い男を、フト一人見附けたが、軒に掛けた蜘蛛（くも）の囲（い）の、ブトリと膨れた蜘蛛の腹より、人間は痩（や）せていた。

ここに照る月、輝く日は、兀（は）げた金銀の雲に乗った、土御門家（つちみかどけ）一流易道、と真赤（まっか）に目立った看板の路地から糶出（せりだ）した、そればかり。

空を見るさえ覗（のぞ）くよう、軒行燈の白いにつけ、両側

の屋根は薄暗い。

この春の日向(ひなた)の道さえ、寂(さ)びれた町の形さえ、行燈に似て、しかもその白けた明(あかり)に映る……表に、御泊りとかいた字の、その影法師のように、町幅の真(まっ)ただ中とも思う処に、曳棄(ひきす)てたらしい荷車が一台、屋台を乗せてガタリとある。

近(ちかづ)いて見ると、いや、荷の蔭に人が居た。

男か、女か。

と、見た体(てい)は、褪(あ)せた尻切(しりきり)の茶の筒袖(つつッぽ)を着て、袖を合わせて、手を拱(こまぬ)き、紺の脚絆穿(きゃはんばき)、草鞋掛(わらじがけ)の細い脚を、車の裏へ、蹈揃(ふみそろ)えて、衝(つ)と伸ばした、抜衣紋(ぬきえもん)に手拭(てぬぐい)を

巻いたので、襟も隠れて見分けは附かぬ。編笠、ひたりと折合わせて、紐を深く被ったなりで、がっくりと俯向いたは、どうやら坐眠りをしていそう。

城の縄張りをした体に、車の轅の中へ、きちんと入って、腰は床几に落したのである。

飴屋か、豆屋か、団子を売るか、いずれにも荷が勝った……おでんを売るには乾いている、その看板がおもしろい。……

四

屋台の正面を横に見せた、両方の柱を白木綿で巻立てたは寂しいが、左右へ渡して紅金巾（べにがなきん）をひらりと釣った、下に横長な掛行燈（かけあんどん）。

一…………………………………坂東よせ鍋（なべ）

一…………………………………尾上天麩羅（おのえてんぷら）

一…………………………………大谷おそば

一…………………………………市川玉子焼

一…………………………………片岡　椀盛（わんもり）

一…………………………………嵐　　お萩

一…………………………………坂東あべ川

一…………………………………市村しる粉

一…………………………………沢村さしみ

一…………………………………中村　洋食

初日出揃い役者役人車輪に相勤め申候

名の上へ、藤の花を末濃(すそご)の紫。口上あと余白の処に、赤い福面女(おかめ)に、黄色な瓢箪男(ひょっとこ)、蒼(あお)い般若(はんにゃ)の可恐(こわ)い面。黒の松茸(まつたけ)、浅黄の蛤(はまぐり)、ちょっと蝶々もあしらって、霞を薄くぼかしてある。

引寄せられて慕って来た、囃子の音には、これだけ気の合ったものは無い。が、松崎は読返してみて苦笑いした。

坂東あべ川、市村しるこ、渠(かれ)はあまい名を春狐(しゅんこ)と号

して、福面女に、瓢箪男、般若の面、……二十五座の座附きで駈出し（かけだ）の狂言方であったから。——

「串戯（じょうだん）じゃないぜ。」

思わず、声を出して独言（ひとりごと）。

「親仁（おとっ）さん、おう、親仁さん。」

なぞのものぞ、ここに木賃の国、行燈の町に、壁を抜出た楽がきのごとく、陽炎に顕（あらわ）れて、我を諷（ふう）するがごとき浅黄の頭巾（ずきん）は？……

屋台の様子が、小児（こども）を対手（あいて）で、新粉細工を売るらしい。片岡牛鍋、尾上天麩羅、そこへ並べさせてみよう了簡（りょうけん）。

「おい、お爺（じ）い。」

と閑（ひま）なあまりの言葉がたき。わざと中（ちゅう）ッ腹に呼んでみたが、寂寞（じゃくまく）たる事、くろんぼ同然。で、操（あやつり）の糸の切れたがごとく、手足を突張（つっぱ）りながら、ぐたりと眠る……俗には船を漕（こ）ぐとこそ言え、これは筏（いかだ）を流す体（てい）。

それに対して、そのまま松崎の分（わか）った袂（たもと）は、我ながら蝶が羽繕いをする心地であった。

まだ十歩と離れぬ。

その物売の、布子の円い背中なぞへ、同じ木賃宿のそこが歪（ゆが）みなりの角から、町幅を、一息、苗代形に幅

の広くなった処があって、思いがけず甍（いらか）の堆（うずたか）い屋形が一軒。斜（ななめ）に中空をさして鯉（こい）の鱗（うろこ）の背を見るよう、電信柱に棟の霞んで聳（そび）えたのがある。

空屋か、知らず、窓も、門（かど）も、皮をめくった、面に斉（ひと）しく、大（おおき）な節穴が、二ツずつ、がツくり窪（くぼ）んだ眼（まなこ）を揃えて、骸骨（がいこつ）を重ねたような。が、月には尾花か、日向（ひなた）の若草、廂（ひさし）に伸びたも春めいて、町から中へ引込んだだけ、生ぬるいほどほかほかする。

四辺（あたり）に似ない大構えの空屋に、――二間ばかりの船板塀（ふないたべい）が水のぬるんだ堰（いせき）に見えて、その前に、お

玉杓子（たまじゃくし）の推競（おしくら）で群る状（さま）に、大勢小児（こども）が集（たか）っていた。

おけらの虫は、もじゃもじゃもじゃと皆動揺（どよ）めく。

その癖静まって声を立てぬ。

直（じ）きその物売の前に立ちながら、この小さな群集の混合ったのに気が附かなかったも道理こそ、松崎は身に染みた狂言最中見ぶつのひっそりした桟敷（さじき）うらを来たも同じだと思った。

役者は舞台で飛んだり、刎（は）ねたり、子供芝居が、ばたばたばた。

五

大当り、尺的（しゃくまと）に矢の刺（ささ）っただけは新粉屋の看板より念入なり。一面藤の花に、蝶々まで同じ絵を彩った一張の紙幕を、船板塀の木戸口に渡して掛けた。正面前の処へ、破筵（やれむしろ）を三枚ばかり、じとじとしたのを敷込んだが、日に乾くか、怪（あやし）い陽炎となって、むらむらと立つ、それが舞台。

取巻いた小児（こども）の上を、鮒（ふな）、鯰（なまず）、黒い頭、緋鯉（ひごい）と見たのは赤い切（きれ）の結綿仮髪（ゆいわたかつら）で、幕の藤の花の末を煽（あお）って、泳ぐように視（なが）められた。が、近附いて見ると、坂東、沢村、市川、中村、尾上、片岡、役者の連名も、如件（くだんのごとし）、

おそば、お汁粉、牛鍋なんど、紫の房の下に筆ぶとに記してあった……

松崎が、立寄った時、カイカイと、ちょうど塀の内で木が入って、紺の衣服(きもの)に、黒い帯した、円い臀(しり)が、蹠(かかと)をひょい、と上げて、頭からその幕へ潜ったのを見た。――筵舞台は行儀わるく、両方へ歪(ゆが)んだが。

半月形に、ほかほかとのぼせた顔して、取廻わした、小さな見物、わやわやとまた一動揺(ひとどよめき)。

中に、目の鋭い屑屋(くずや)が一人、箸(はし)と籠(かご)を両方に下げて、挟んで食えそうな首は無しか、とじろじろと睨廻(ねめま)わす。

もう一人、袷(あわせ)の引解(ひっと)きらしい、汚れた縞(しま)の単衣(ひとえ)もの

に、綟(よ)綟れの三尺で、頬被(ほおかぶ)りした、ずんぐり肥(ふと)った赤ら顔の兄哥(あにい)が一人、のっそり腕組をして交(まじ)る……

二人ばかり、十二三、四五ぐらいな、子守の娘(ちび)が、横ちょ、と猪首(いくび)に小児(こども)を背負(しょ)って、唄も唄わず、肩、背を揺(ゆす)る。他は皆、茄子(なすび)の蔓(つる)に蛙の子。

楽屋——その塀の中(うち)で、またカチカチと鳴った。

処へ、通(とおり)から、ばらばらと駈(か)けて来た、別に二三人の小児を先に、奴(やっこ)を振らせた趣で、や！　あの美しい女(ひと)と、中折(なかおれ)の下に眉の濃い、若い紳士と並んで来たのは、浮世の底へ霞を引いて、天降(あまくだ)ったように見えた。

ここだ、この音だ——と云ったその紳士の言(ことば)を聞

いた、松崎は、やっぱり渠等（かれら）も囃子の音に誘われて、男女（なんにょ）のどちらが言出したか、それは知らぬが、連立って、先刻（さっき）の電車の終点から、ともに引寄せられて来たものだと思った。

　時に、その二人も、松崎も、大方この芝居の鳴物が、遠くまで聞えたのであろうと頷（うなず）く……囃子はその癖、ここに尋ね当った現下（いま）は何も聞えぬ。……

　絵の藤の幕間（まくあい）で、木は入ったが舞台は空しい。

「幕が長いぜ、開けろい。遣（や）らねえか、遣らねえか。」

とずんぐり者の頬被（ほおかぶり）は肩を揺（ゆす）った。が、閉ったばかり、いささかも長い幕間でない事が、自分にも可笑（おか）

しいか、鼻先(はなっさき)の手拭(てぬぐい)の結目(むすびめ)を、ひこひこと遣って笑う。様子が、思いも掛けず、こんな場所、子供芝居の見物の群(むれ)に来た、美しい女(ひと)に対して興奮したものらしい。実際、雲の青い山の奥から、淡彩(うすいろどり)の友染(ゆうぜん)とも見える、名も知れない一輪の花が、細谷川を里近く流れ出(い)でて、淵(ふち)の藍(あい)に影を留めて人目に触れた風情あり。石斑魚(うぐい)が飛んでも松葉が散っても、そのまま直ぐに、すらすらと行方も知れず流れよう、それをしばらくでも引留めるのは、ただちっとも早く幕を開ける外はない、と松崎の目にも見て取られた。

「頼むぜ頭取。」

頬被《ほおかぶり》がまた喚《わめ》く。

六

あたかもその時、役者の名の余白に描いた、福面女《おかめ》、瓢箪男《ひょっとこ》の端をばさりと捲《まく》ると、月代《さかやき》茶色に、半白《ごましお》のちょん髷仮髪《まげかつら》で、眉毛の下《さが》った十ばかりの男の児《こ》が、渋団扇《しぶうちわ》［＃「団扇」は底本では「団扉」］の柄を引掴《ひッつか》んで、ひょこりと登場。

「待ってました。」

と頬被が声を掛けた。

奴（やっこ）は、とぼけた目をきょろんと遣（や）ったが、

「ちぇ、小道具め、しようがねえ。」

と高慢な口を利いて、尻端折（しりはしょ）りの脚をすってん、刎（は）ねるがごとく、二つ三つ、舞台をくるくると廻るや否や、背後（うしろ）向きに、ちょっきり結びの紺兵児（こんへこ）の出尻（でっちり）で、頭から半身また幕へ潜（くぐ）ったが、すぐに摺抜（すりぬ）けて出直したのを見れば、うどん、当り屋とのたくらせた穴だらけの古行燈（ふるあんどん）を提げて出て、筵（むしろ）の上へ、ちょんと直すと、奴（やっこ）はその蔭で、膝を折って、膝開（ひざはだ）けに踏張（ふんば）りながら、件（くだん）の渋団扇で、ばたばたと煽（あお）いで、台辞（せりふ）。

「米が高値（たか）いから不景気だ。嬶々（かかあ）めにまた叱られべい

な。」
　でも、ちょっと含羞(はにか)んだか、日に焼けた顔を真赤(まっか)に俯向(うつむ)く。同じ色した渋団扇、ばさばさばさ、と遣った処は巧緻(うま)いものなり。

「いよ、牛鍋。」と頬被。

片岡牛鍋と云うのであろう、が、役は饂飩屋(うどんや)の親仁(おやじ)である。

　チャーン、チャーン……幕の中(うち)で鉦(かね)を鳴らす。

――迷児(まいご)の、迷児の、迷児やあ――

　呼ばわり連れると、ひょいひょいと三人出た……団栗(どんぐり)ほどな背丈を揃えて、紋羽(もんば)の襟巻を頸(くび)に巻いた大

屋様。月代(さかやき)が真青(まっさお)で、鬢(びん)の膨れた色身(いろみ)な手代、うんざり鬢の俠(いさみ)が一人、これが前(さき)へ立って、コトン、コトンと棒を突く。

「や、これ、太吉さん、」

と差配様(おおやさま)声を掛ける。中の青月代(あおさかやき)が、提灯(ちょうちん)を持替えて、

「はい、はい。」と返事をした。が、界隈(かいわい)の荒れた卵塔場から、葬礼(とむらい)あとを、引攫(ひっさら)って来たらしい、その提灯は白張(しらはり)である。

大屋は、カーンと一つ鉦(かね)を叩いて、

「大分夜(よ)が更けました。」

「亥刻（いのこく）過ぎでございましょう、……ねえ、頭（かしら）。」
「そうよね。」
と棒をコツン、で、くすくすと笑う。
「笑うな、真面目（まじめ）に真面目に、」と頬被がまた声を掛ける。
差配様が小首を傾け、
「時に、もし、迷児、迷児、と呼んで歩行（ある）きますが、誰某（だれそれ）と名を申して呼びませいでも、分りますものでござりましょうかね。」
「私（わっし）もさ、思ってるんで。……どうもね、ただこう、迷児と呼んだんじゃや、前方（さき）で誰の事だか見当が附くめ

えてね、迷児と呼ばれて、はい、手前でござい、と顔を出す奴（やつ）もねえもんでさ。」とうんざり鬢が引取って言う。

「まずさね……それで闇（くら）がりから顔を出せば、飛んだ妖怪（ばけもの）でござりますよ。」

青月代の白男（しろおとこ）が、袖を開いて、両方を掌（て）で圧（おさ）え、

「御道理（ごもっとも）でございますとも。それがでございますよ。はい、こうして鉦太鼓で探捜（さがし）に出ます騒動ではございますが、捜されます御当人の家（うち）へ、声が聞えますような近い所で、名を呼びましては、表向（おもてむき）の事でも極（きまり）が悪うございましょう。それも小児（こども）や爺婆（じじばば）ならまだしも、

取って十九という妙齢(としごろ)の娘の事でございますから。」

と考え考え、切れ切れに台辞を運ぶ。

その内も手を休めず、ばっばっと赤い団扇、火が散るばかり、これは鮮明(あざやか)。

七

青月代は辿々(たどたど)しく、

「で、ございますから、遠慮をしまして、名は呼びません、でございましたが、おっしゃる通り、ただ迷児迷児と喚(わめ)きました処で分るものではございません。も

う大分町も離れました、徐々（そろそろ）娘の名を呼びましょう。」
「成程々々、御心附至極の儀。そんなら、ここから一つ名を呼んで捜す事にいたしましょう。頭（かしら）、音頭を願おうかね。」
「迷児の音頭は遣（や）りつけねえが、ままよ。……差配（おおや）さん、合方だ。」
チャーンと鉦（かね）の音（ね）。
「お稲（いな）さんやあ、——トこの調子かね。」
「結構でございますね、差配さん。」
差配はも一つ真顔でチャーン。
「さて、呼声に名が入（い）りますと、どうやら遠い処で、

幽(かすか)に、はあい……」と可哀(あわれ)な声。
「変な声だあ。」
と頭(かしら)は棒を揺(ゆす)って震える真似する。
「この方、総入歯で、若い娘の仮声(こわいろ)だちね。いえさ、したが何となく返事をしそうで、大(おおき)に張合が着きましたよ。」
「その気で一つ伸(の)しましょうよ。」
三人この処で、声を揃えた。チャーン——
「——迷児の、迷児の、お稲さんやあ……」
と一列(ひとなら)び、筵(むしろ)の上を六尺ばかり、ぐるりと廻る。手足も小さく仇(あど)ない顔して、目立った仮髪(かつら)の髷(まげ)ばかり。

麦藁細工（むぎわらざいく）が化けたようで、黄色の声で長（ま）せた事、ものを云う笛を吹くか、と希有（けぶ）に聞える。

美しい女（ひと）は、すっと薄色の洋傘（パラソル）を閉めた……ヴェールを脱いだように濃い浅黄の影が消える、と露の垂りそうな清（すずし）い目で、同伴（つれ）の男に、ト瞳を注ぎながら舞台を見返す……その様子が、しばらく立停（たちどま）ろうと云うらしかった。

「鍋焼饂飩（なべやきうどん）…」

と高らかに、舞台で目を眠るまで仰向（あおむ）いて呼んだ。

「……ああ、腹が空いた、饂飩屋。」

「へいへい、頭（かしら）、難有（ありがと）うござります。」

うんざり鬢（びん）は額を叩いて、

「おっと、礼はまだ早かろう。これから相談だ。ねえ、太吉さん、差配さん、ちょっぴり暖まって、行こうじゃねえかね。」

「賛成。」

と見物の頬被りは、反（そり）を打って大（おおい）に笑う。

仕種（しぐさ）を待構えていた、饂飩屋小僧は、これから、割前（わりまえ）の相談でもありそうな処を、もどかしがって、

「へい、お待遠様で。」と急いで、渋団扇で三人へ皆配る。

「早いんだい、まだだよ。」

と差配になったのが地声で甲走（かんばし）った。が、それでも、ぞろぞろぞろぞろと口で言い言い三人、指二本で掻込（かっこ）む仕形（しかた）。

「頭（かしら）、……御町内様も御苦労様でございます。お捜しなさいますのは、お子供衆で？」

「小児なものかね、妙齢（としごろ）でございますよ。」

と青月代が、襟を扱（しご）いて、ちょっと色身で応答（あしら）う。

「へい、お妙齢、殿方でござりますか、それともお娘御で。」

「妙齢の野郎と云う奴があるもんか、初厄の別嬪（べっぴん）さ。」

と頭（かしら）は口で、ぞろりぞろり。

「ああ、さて、走り人（びと）でございますの。」
「はしり人というのじゃないね、同じようでも、いずれ行方は知れんのだが。」
と差配は、チンと洟（はな）をかむ。
美しい女（ひと）の唇に微笑（ほほえみ）が見えた……
「いつの事、どこから、そのお姿が見えなくなりました。」
と饂飩屋は、渋団扇を筵（むしろ）に支（つ）いて、ト中腰になって訊（き）く。

八

差配(おおや)は溜息(ためいき)と共に気取って頷(うなず)き、

「いつ、どこでと云ってね、お前(めえ)、縁日の宵の口や、顔見世の夜明から、見えなくなったというのじゃない。その娘はね、長い間煩らって、寝ていたんだ。それから行方(ゆくえ)が知れなくなったよ。」

子供芝居の取留めのない台辞(せりふ)でも、ちっと変な事を言う。

「へい。」

舞台の饂飩屋も異な顔で、

「それでは御病気を苦になさって、死ぬ気で駈出(かけだ)した

のでございますかね。」
「寿命だよ。ふん、」と、も一つかんで、差配は鼻紙を袂(たもと)へ落す。
「御寿命、へい、何にいたせ、それは御心配な事で。お怪我(けが)がなければ可(よ)うございます。」
「賽(さい)の河原は礫原(こいしはら)、石があるから躓(つまず)いて怪我をする事もあろうかね。」と陰気に差配。
「何を言わっしゃります。」
「いえさ、饂飩屋さん、合点の悪い。その娘はもう亡くなったんでございますよ。」と青月代が傍(そば)から言った。
「お前様も。死んだ迷児(まいご)という事が、世の中にござり

ますかい。」

「六道の闇（やみ）に迷えば、はて、迷児ではあるまいか。」

「や、そんなら、お前様方は、亡者（もうじゃ）をお捜しなさりますのか。」

「そのための、この白張提灯（しらはりぢょうちん）。」

と青月代が、白粉（おしろい）の白（しろ）けた顔を前へ、トぶらりと提げる。

「捜いて、捜いて、暗（やみ）から闇へ行く路じゃ。」

「ても……気味の悪い事を言いなさる。」

「饂飩屋、どうだ一所に来るか。」

と頭（かしら）は鬼のごとく棒を突出す。

饂飩屋は、あッと尻餅。

引被(ひっかぶ)せて、青月代が、

「ともに冥途(めいど)へ連行(つれゆ)かん。」

「来(きた)れや、来れ。」と差配(おおや)は異変な声繕(こわづくろい)。

一堪(ひとたま)りもなく、饂飩屋はのめり伏した。渋団扇で、頭を叩くと、ちょん髷仮髪(まげかつら)が、がさがさと鳴る。

「占めたぞ。」

「喰遁(くいに)げ。」

と囁(ささ)き合うと、三人の児(こ)は、ひょいと躍って、蛙のようにポンポン飛込む、と幕の蔭に声ばかり。

——迷児の、迷児の、お稲さんやあ——

描ける藤は、どんよりと重く匂って、おなじ色に、閃々（きらきら）と金糸のきらめく、美しい女（ひと）の半襟と、陽炎に影を通わす、居周囲（いまわり）は時に寂寞（ひっそり）した、楽屋の人数（にんず）を、狭い処に包んだせいか、張紙幕（びらまく）が中ほどから、見物に向いて、風を孕（はら）んだか、と膨れて見える……この影が覆蔽（かぶさ）るであろう、破筵（やれむしろ）は鼠色に濃くなって、蹲（しゃが）み込んだ児等（こども）の胸へ持上って、蟻（あり）が四五疋、うようよと這（は）った。……が、なぜか、物の本の古びた表面（おもて）へ、――来れや、来れ……と仮名でかきちらす形がある。

　見つつ松崎が思うまで、来れや、来れ……と言った差配（おおや）の言葉は、怪しいまで陰に響いて、幕の膨らんだ

につけても、誰か、大人が居て、蔭で声を助(す)けたらしく聞えたのであった。

見物の児等は、神妙に黙って控えた。

頬被(ほおかぶり)のずんぐり者は、腕を組んで立ったなり、こくりこくりと居眠る……

饂飩屋が、ぼやんとした顔を上げた。さては、差置いた荷のかわりの行燈(あんどん)も、草紙の絵ではない。

蟻は隠れたのである。

九

「狐か、狸か、今のは何じゃい、どえらい目に逢わせくさった。」

と饂飩屋は坂塀はずれに、空屋の大屋根から空を仰いで、茫然（ぼんやり）する。

美しい女（ひと）と若い紳士の、並んで立った姿が動いて、両方木賃宿（きちんやど）の羽目板の方を見向いたのを、——無台が寂しくなったため、もう帰るのであろうと見れば、さにあらず。

そこへ小さな縁台を据えて、二人の中に、ちょんぼりとした円髷（まるまげ）を俯向（うつむ）けに、揉手（もみて）でお叩頭（じぎ）をする古女房が一人居た。

「さあ、どうぞ、旦那様、奥様、これへお掛け遊ばして、いいえ、もう汚いのでございますが、お立ちなすっていらっしゃいますより、ちっとは増(まし)でございます。」
と手拭(てぬぐい)で、ごしごし拭いを掛けつつ云う。その手で――一所に持って出たらしい、踏台が一つに乗せてあるのを下へおろした。
「いや、俺(おれ)たちは、」
若い紳士は、手首白いのを挙げて、払い退(の)けそうにした。が、美しい女(ひと)が、意を得たという晴やかな顔して、黙ってそのまま腰を掛けたので。
「難有(ありがと)う。」

渠(かれ)も斉(ひと)しく並んだのである。

「はい、失礼を。はいはい、はい、どうも。」と古女房は、まくし掛けて、早口に饒舌(しゃべ)りながら、踏台を提げて、小児(こども)たちの背後(うしろ)を、ちょこちょこ走り。で、松崎の背後(うしろ)へ廻る。

「貴方(あなた)様は、どうぞこれへ。はい、はい、はい。」

「恐縮ですな。」

かねて期(ご)したるもののごとく猶予(ため)らわず腰を落着けた、……松崎は、美しい女(ひと)とその連(つれ)とが、去る去らないにかかわらず、——舞台の三人が鉦(かね)をチャーンで、迷児の名を呼んだ時から、子供芝居は、とにかくこの

一幕を見果てないうちは、足を返すまいと思っていた。声々に、可哀(あわれ)に、寂しく、遠方(おちかた)を幽(かすか)に、――そして幽冥(ゆうめい)の界(さかい)を暗(やみ)から闇へ捜廻(さがしまわ)ると言った、厄年十九の娘の名は、お稲と云ったのを鋭く聞いた――仔細(しさい)あって忘れられぬ人の名なのであるから。――

「おかみさん、この芝居はどういう筋だい。」

「はいはい、いいえ、貴下(あなた)、子供が出たらめに致しますので、取留めはございませんよ。何の事でございますか、私どもは一向に分りません。それでも稽古(けいこ)だの何のと申して、それは騒ぎでございましてね、はい、はい、はい。」

で手を揉み手を揉み、正面には顔を上げずに、ひよこひよこして言う。この古女房は、くたびれた藍色の半纏に、茶の着もので、紺足袋に雪駄穿で居たのである。

「馬鹿にしやがれ。ヘッ、」

と唐突に毒を吐いたは、立睡りで居た頬被りで、弥蔵の肱を、ぐいぐいと懐中から、八ツ当りに突掛けながら、

「人、面白くもねえ、貴方様お掛け遊ばせが聞いて呆れら。おはいはい、襟許に着きやがって、ヘッ。俺の方が初手ッから立ってるんだ。衣類に脚が生えやしめ

えし……草臥(くたび)れるんなら、こっちが前(さき)だい。服装(みなり)で価値(ねだん)づけをしやがって、畜生め。ああ、人間下(さが)りたくはねえもんだ。」

古女房は聞かない振(ふり)で、ちょこちょこと走って退(の)いた。一体、縁台まで持添えて、どこから出て来たのか、それは知らない。そうして引返(ひっかえ)したのは町の方。

そこに、先刻(さっき)の編笠目深(まぶか)な新粉細工が、出岬(でさき)に霞んだ捨小舟(すておぶね)という形ちで、寂寞(じゃくまく)としてまだ一人居る。その方へ、ひょこひょこ行(ゆ)く。

ト頬被りは、じろりと見遣って、

「ざまあ見ろ、巫女(いちこ)の宰取(さいとり)、活(い)きた兄哥(あにい)の魂が分るか

い。ヘッ、」と肩をしゃくりながら、ぶらりと見物の群（むれ）を離れた。

ついでに言おう、人間を挟みそうに、籠と竹箸（たけばし）を構えた薄気味の悪い、黙然（だんまり）の屑屋（くずや）は、古女房が、そっち側の二人に、縁台を進めた時、ギロリと踏台の横穴を覗（のぞ）いたが、それ切りフイと居なくなった。……

いま、腰を掛けた踏台の中には、ト松崎が見ても一枚の屑も無い。

十

「おい、出て来ねえな、おお、大入道、出じゃねえか、遅いなあ。」

少々舞台に間が明いて、魅（つま）まれたなりの饂飩小僧（うどんこぞう）は、てれた顔で、……幕越しに楽屋を呼んだ。

幕の端（はじ）から、以前の青月代（あおさかやき）が、黒坊（くろんぼ）の気か、俯向（うつむ）けに仮髪（かつら）ばかりを覗（のぞ）かせた。が、そこの絵の、狐の面が抜出したとも見えるし、古綿の黒雲から、新粉細工の三日月が覗くとも視（なが）められる。

「まだじゃねえか、まだお前、その行燈（あんどん）がかがみにならねえよ……科（しぐさ）が抜けてるぜ、早く演（や）んねえな。」

と云って、すぽりと引込（ひっこ）む。——はてな、行燈が、

かがみに化ける……と松崎は地の凸凹（でこぼこ）する蹈台（ふみだい）の腰を乗出す。

同じ思いか、面影（おもかげ）も映しそうに、美しい女（ひと）は凝（じっ）と視（み）た。ひとり紳士は気の無い顔して、反身（そりみ）ながらぐったりと凭掛（よりかか）った、杖（ステッキ）の柄を手袋の尖で突いたものなり。

饂飩屋は、行燈に向直ると、誰も居ないのに、一人で、へたへたと挨拶（あいさつ）する。

「光栄（おいで）なさいまし。……直ぐと暖めて差上げます。今、もし、飛んだお前さん、馬鹿な目に逢いましてね、火も台なしでござります。へい、辻の橋の玄徳稲荷（げんとくいなり）様は、御身分柄、こんな悪戯（いたずら）はなさりません。狸か獺（かわうそ）でご

ざりましょう。迷児の迷児の、――と鉦を敲いて来やがって饂飩を八杯攫らいました……お前さん。」

と滑稽た眉毛を、寄せたり、離したり、目をくしゃくしゃと饒舌ったが、

「や、一言も、お返事なしだね、黙然坊様。鼻だの、口だの、ぴこぴこ動いてばかり。……あれ、誰か客人だと思ったら――私の顔だ――道理で、兄弟分だと頼母しかったに……宙に流れる川はなし――七夕様でもないものが、銀河には映るまい。星も隠れた、真暗、」

と仰向けに、空を視る、と仕掛けがあったか、頭の

上のその板塀越（ごし）、幕の内か潜（くぐ）らして、両方を竹で張った、真黒（まっくろ）な布の一張（ひとはり）、筵（むしろ）の上へ、ふわりと投げて颯（さっ）と拡げた。

と見て、知りつつ松崎は、俄然（がぜん）として雲が湧（わ）いたか、とぎょっとした、——電車はあっても——本郷から遠路（とおみち）を掛けた当日。麗（うらら）かさも長閑（のどか）さも、余り積（つも）って身に染むばかり暖かさが過ぎたので、思いがけない俄雨（にわかあめ）を憂慮（きづかわ）ぬではなかった処。

彼方（むこう）の新粉屋が、ものの遠いように霞むにつけても、家路遥（はる）かな思いがある。

また、余所（よそ）は知らず、目の前のざっと劇場ほどなそ

の空屋の裡(うち)には、本所の空一面に漲(みなぎ)らす黒雲は、畳込んで余りあるがごとくに見えた。

暗い舞台で、小さな、そして爺様(じいさま)の饂飩屋は、おっかな、吃驚(びっくり)、わなわな大袈裟(おおげさ)に震えながら、

「何に映る……私(わし)が顔だ、——行燈(あんどん)か。まさかとは思うが、行燈か、行燈か？……返事をせまいぞ。この上手前(てめえ)に口を利かれては叶(かな)わねえ。何分頼むよ。……面(つら)の皮は、雨風にめくれたあとを、幾たびも張替えたが、火事には人先に持って遁(に)げる何十年以来(このかた)の古馴染(ふるなじみ)だ。

馴染がいに口を利くなよ、私(わし)が呼んでも口を利くなよ。はて、何に映る顔だ知らん。……口を利くな、口

を利くな。」

……と背の低いのが、滅入込(めりこ)みそうに、大(おおき)な仮髪(かつら)の頸(うなじ)を窘(すく)め、ひッつりそうな拳(こぶし)を二つ、耳の処へ威(おど)すがごとく、張肱(はりひじ)に、しっかと握って、腰をくなくなと、抜足差足。

で、目を据え、眉を張って、行燈に擦寄り擦寄り、

「はて、何に映った顔だ知らん、行燈か、行燈か、……口を利くなよ、行燈か。」

と熟(じっ)と覗(のぞ)く。

途端に、沈んだが、通る声で、

「私……行燈だよ。」

「わい、」と叫んで、饂飩屋は舞台を飛退く。

十一

この古行燈が、仇も情も、赤くこぼれた丁子のごとく、煤の中に色を籠めて消えずにいて、それが、針の穴を通して、不意に口を利いたような女の声には、松崎もぎょっとした。

饂飩屋は吃驚の呼吸を引いて、きょとんとしたが「俺あ可厭だぜ。」と押殺した低声で独言を云ったと思うと、ばさりと幕摺れに、ふらついて、隅から

蹌踉（よろ）け込んで見えなくなった。

時に――私……行燈だよ、――と云ったのは、美しい女（ひと）である事に、松崎も心附いて、――驚いて楽屋へ遁（に）げた小児（こども）の状（さま）の可笑（おかし）さに、莞爾（にっこり）、笑（えみ）を含んだ、燃ゆるがごときその女（ひと）の唇を見た。

「つい言ッちまったのよ。」

と紳士を見向く。

「困った人だね、」

と杖（ステッキ）を取って、立構えをしながら、

「さあ、行こうか。」

「可（い）いわ、もうちっと……」

「恐怖(こわ)いよう。」

と子守の袂(たもと)にぶら下った小さな児が袖を引張(ひっぱ)って言う。

「こわいものかね、行燈じゃないわ。……綺麗な奥さんが言ったんだわ。」とその子守は背(せな)の子を揺(ゆす)り上げた。

舞台を取巻いた大勢が、わやわやとざわついて、同音に、声を揚げて皆(みんな)笑った……小さいのが二側(ふたかわ)三側(みかわ)、ぐるりと黒く塊(かたま)ったのが、変にここまで間を措(お)いて、思出したように、遁込(にげこ)んだ饂飩屋の滑稽な図を笑ったので、どっというのが、一つ、町を越した空屋の裏あたりに響いて、壁を隔てて聞くようにぼやけて寂しい。

「東西、東西。」

青月代(あおさかやき)が、例の色身(いろみ)に白い、膨(ふっく)りした童顔(わらわがお)を真正面(まっしょうめん)に舞台に出て、猫が耳を撫(な)でる……トいった風で、手を挙げて、見物を制しながら、おでんと書いた角行燈をひょいと廻して、ト立直して裏を見せると、かねて用意がしてあった……その一小間(ひとこま)が藍(あい)を濃く真青(まっさお)に塗ってあった。

行燈が化けると云った、これが、かがみのつもりでもあろう、が、上を蔽(おお)うた黒布の下に、色が沈んで、際立って、ちょうど、間近な縁台の、美しい女(ひと)と向合(むきあわ)せに据えたので、雪なす面(おもて)に影を投げて、媚(なまめ)かしく

も凄(すご)くも見える。

青月代は飄然(ひらり)と潜(くぐ)った。

それまでは、どれもこれも、吹矢に当って、バッタリと細工ものが顕(あらわ)れる形に、幕へ出入りのひょっこらさ加減、絵に描(か)いた、小松茸(こまつたけ)、大きな蛤(はまぐり)十ばかり一所に転げて出そうであったが。

舞台に姿見の蒼(あお)い時よ。

はじめて、白玉のごとき姿を顕す……一人(にん)の立女形(たておやま)、撫肩しなりと脛(はぎ)をしめつつ褄(つま)を取った状(さま)に、内端(うちわ)に可愛(かわい)らしい足を運んで出た。糸も掛けない素の白身(はくしん)、雪の練糸(ねりいと)を繰るように、しなやかなものである。

背丈恰好(かっこう)、それも十一二の男の児が、文金高髷の仮髪(かつら)して、含羞(はにかん)だか、それとも芝居の筋の襯染(したじめ)のためか、胸を啣(くわ)える俯向(うつむ)き加減、前髪の冷たさが、身に染む風情に、すべすべと白い肩をすくめて、乳を隠す嬌態(しな)らしい、片手柔い肱(ひじ)を外に、指を反らして、ひたりと附けた、その頤(おとがい)のあたりを蔽(おお)い、額も見せないで、なよなよと筵(むしろ)に雪の踵(かかと)を散らして、静(しずか)に、行燈の紙の青い前。

十二

綿かと思う柔（やわらか）な背を見物へ背後（うしろ）むきに、その擬（こしら）えし姿見に向って、筵に坐ると、しなった、細い線を、左の白脛（しらはぎ）に引いて片膝を立てた。

この膝は、松崎の方へ向く。右の搔込（かっこ）んで、その腰を据えた方に、美しい女（ひと）と紳士の縁台がある。

まだ顔を見せないで、打向った青行燈の抽斗（ひきだし）を抜くと、そこに小道具の支度があった……白粉刷毛（おしろいばけ）の、夢の覚際（さめぎわ）の合歓（ねむ）の花、ほんのりとあるのを取って、媚（なまめ）かしく化粧をし出す。

知ってはいても、それが男の児とは思われない。耳朶（みみたぼ）に黒子（ほくろ）も見えぬ、滑（なめら）かな美しさ。松崎は、むざと

集（たか）って血を吸うのが傷（いたま）しさに、蹈台（ふみだい）の蚊（か）をしきりに気にした

　蹈台の蚊は、おかしいけれども、はじめ腰掛けた時から、間を措（お）いては、ぶんと一つ、ぶんとまた一つ、穴から唸（うな）って出る……足と足を摺合（すりあ）わせたり、頭（かぶり）を掉（ふ）ったり、避（よ）けつ払いつしていたが、日脚の加減か、この折から、ぶくぶくと溝（どぶ）から泡の噴く体（てい）に数を増した。

　人情、なぜか、筵の上のその皓体（こうたい）に集（たか）らせたくないので、背後（うしろ）へ、町へ、両の袂を叩いて払った。

　そして、この血に餓（う）えて呻（うめ）く虫の、次第に勢（いきおい）を加

えたにつけても、天気模様の憂慮（きづかわ）しさに、居ながら見渡されるだけの空を覗（のぞ）いたが、どこのか煙筒（えんとつ）の煙の、一方に雪崩（なだ）れたらしい隈（くま）はあったが、黒しと怪（あやし）む雲はなかった。ただ、町の静（しずか）さ。板の間の乾（から）びた、人なき、広い湯殿のようで、暖い霞の輝いて淀（よど）んで、漾（ただよ）い且つ漲（みなぎ）る中に、蚊を思うと、その形、むらむら波を泳ぐ海月（くらげ）に似て、槊（ほこ）を横（よこた）えて、餓えたる虎の唄を唄って刎（は）ねる。……

この影がさしたら、四ツ目あたりに咲き掛けた紅白の牡丹（ぼたん）も曇ろう。……嘴（はし）を鳴らして、ひらりひらりと縦横無尽に踊る。

が、現（うつつ）なの光景（ありさま）は、長閑（のどか）な日中（ひなか）の、それが極度であった。――

やがて、蚊ばかりではない、舞台で狐やら狸やら、太鼓を敲（たた）き笛を吹く……本所名代の楽器に合わせて、猫が三疋。小夜具（こよぎ）を被（かぶ）って、仁王立（だち）、一斗樽（だる）の三ツ目入道、裸の小児（こども）と一所になって、さす手の扇、ひく手の手拭、揃って人も無げに踊出（おどりいだ）した頃は、俄雨（にわかあめ）を運ぶ機関車のごとき黒雲が、音もしないで、浮世の破（やぶれ）めを切張（きりばり）の、木賃宿の数の行燈、薄暗いまで屋根を圧して、むくむくと、両国橋から本所の空を渡ったのである。

次第は前後した。

これより前(さき)、姿見に向った裸の児が、濃い化粧で、襟白粉(えりおしろい)を襟長く、くッきりと粧(よそお)うと、カタンと言わして、刷毛(はけ)と一所に、白粉を行燈の抽斗(ひきだし)に蔵(しま)った時、しなりとした、立膝のままで、見物へ、ひょいと顔を見せたと思え。

島田ばかりが房々(ふさふさ)と、やあ、目も鼻も無い、のっぺらぼう。

唇ばかり、埋め果てぬ、雪の紅梅、蕊(しべ)白く莞爾(にっこり)した。

はっと美しい女(ひと)は身を引いて、肩を摺(ず)った羽織の手先を白々と紳士の膝へ。

額も頬も一分、三分、小鼻も隠れたまで、いや塗ったとこそ言え。白粉で消した顔とは思うが、松崎さえ一目見ると変な気がした。

そこへ、件（くだん）の三ツ目入道、どろどろどろと顕（あらわ）れけり

十三

樽を張子（はりこ）で、鼠色の大入道、金銀張分けの大の眼（まなこ）を、行燈見越（みこし）に立（たち）はだかる、と縄からげの貧乏徳利（どっくり）をぬいと突出す。

「丑満（うしみつ）の鐘を待兼ねたやい。……わりや雪女。」
とドス声で甲（かん）を殺す……この熊漢（くまおとこ）の前に、月からこぼれた白い兎（うさぎ）、天人の落し児といった風情の、一束（ひとつか）ねの、雪の膚（はだ）は、さては化夥間（ばけなかま）の雪女であった。
「これい、化粧が出来たら酌をしろ、ええ。」
と、どか胡坐（あぐら）、で、着ものの裾（すそ）が堆（うずたか）い。
その地響きが膚に応（こた）えて、震える状（さま）に、脇の下を窄（すぼ）めるから、雪女は横坐りに、
「あい、」と手を支（つ）く。
「そりや、」
と徳利を突出した、入道は懐から、鮑貝（あわびがい）を掴取（つかみと）って、

胸を広く、腕へ引着け、雁(がん)の首を捻(ね)じるがごとく白鳥の口から注(つ)がせて、

「わりゃ、わなわなと震えるが、素膚(すはだ)に感じるか、いやさ、寒いか。」と、じろじろと視(みつ)めて寛々たり。

雪女細い声。

「はい……冷とうござんすわいな。」

「ふん、それはな、三途河(そうずか)の奪衣婆(だつえば)に衣(きもの)を剝(は)がれて、まだ間が無うて馴(な)れぬからだ。ひくひくせずと堪えくされ。雪女が寒いと吐(ぬか)すと、火が火を熱い、水が水を冷い、貧乏人が空腹(ひだる)いと云うようなものだ。汝(うぬ)が勝手の我ままだ。」

「情（なさけ）ない事おっしゃいます、辛うて辛うてなりませんもの。」

とやっぱり戦（わなな）く。その姿、あわれに寂しく、生々（なまなま）とした白魚の亡者に似ている。

「もっともな、わりゃ……」

言い掛けた時であった。この見越入道、ふと絶句で、大（おおき）な樽の面（つら）を振って、三つ目を六つに晃々（ぎらぎら）ときょろつかす。

幕の蔭と思う絵の裏で、誰とも知らず、静まった藤の房に、生温（なまぬる）い風の染む気勢（けはい）で、

「……紅蓮（ぐれん）、大紅蓮、紅蓮、大紅蓮……」と後見（うしろ）をつ

けたものがある。

「紅蓮、大紅蓮の地獄に来(きた)って、」

と大入道は樽の首を揺据(ゆりす)えた。

「わりゃ雪女となりおった。が、魔道の酌取(しゃくとり)、枕添(まくらぞい)、芸妓(げいしゃ)、遊女(じょろう)のかえ名と云うのだ。娑婆(しゃば)、人間の処女(きむすめ)で……」

また絶句して、うむと一つ、樽に呼吸(いき)を詰めて支(つか)えると、ポカンとした叩頭(おじぎ)をして、

「何だっけね、」

と可愛い声。

「お稲、」と雪女が小さく言った。

松崎は耳を澄ます。

と同時であった。

「……お稲、お稲さんですって、……」と目のふちに、薄く、行燈の青い影が射（さ）した。美しい女（ひと）は、ふと紳士を見た。

「お稲荷（いなり）、稲荷さんと云うんだね、白狐（しろぎつね）の化けた処なんだろう。」

わけもなくそう云って、紳士は、ぱっと巻莨（まきたばこ）に火を点ずる。

その火が狐火のように見えた。

「ああ、そうなのね。」

美しい女（ひと）は頷（うなず）いたのである。

松崎も、聞いて、成程そうらしくも見て取った。

「むむ、そのお稲で居た時の身の上話、酒の肴（さかな）に聞かさんかい。や、ただわなわなと震えくさる、まだ間が無うて馴れぬからだ。こりゃ、」

と肩へむずと手を掛けると、ひれ伏して、雪女は溶けるように潸然（さめざめ）と泣く。

十四

「陰気だ陰気だ、此奴（こいつ）滅入（めい）って気が浮かん、こりゃ、

汝等出て燥げやい。」

三ツ目入道、懐手の袖を刎ねて、飽貝の杯を、大く弧を描いて楽屋を招く。

これの合図に、相馬内裏古御所の管絃。笛、太鼓に鉦を合わせて、トッピキ、ひゃら、ひゃら、テケレンどん、幕を煽って、どやどやと異類異形が踊って出でた。

狐が笛吹く、狸が太鼓。猫が三疋、赤手拭、すッとこ被り、吉原かぶり、ちょと吹流し、と気取るも交って、猫じゃ猫じゃの拍子を合わせ、トコトンと筵を踏むと、塵埃立交る、舞台に赤黒い渦を巻いて、吹流し

が腰をしゃなりと流すと、すッとこ被りが、ひょいと刎(は)ねる、と吉原被りは、ト招ぎの手附。

狸の面、と、狐の面は、差配の禿(はげ)と、青月代(あおさかやき)の仮髪(かつら)のまま、饂飩屋の半白頭(ごましおあたま)は、どっち付かず、鼬(いたち)のような面を着て、これが鉦で。

時々、きちきちきちきちきちという。狐はお定りのコンを鳴く。狸はあやふやに、モウと唸(うな)って、膝にのせた、腹鼓。

囃子に合わせて、猫が三疋、踊る、踊る、いや踊る事わ。

青い行燈とその前に突伏(つっぷ)した、雪女の島田のまわり

を、ぐるりぐるりと廻るうちに、三ツ目入道も、ぬいと立って、のしのしと踊出す。

続いて囃方（はやしかた）惣踊（そうおど）り。フト合方が、がらりと替って、楽屋で三味線（さみせん）の音（ね）を入れた。

——必ずこの事、この事必ず、丹波の太郎に沙汰するな、この事、必ず、丹波の太郎に沙汰するな——と揃って、異口同音（くちぐち）に呼ばわりながら、水車（みずぐるま）を舞込むごとく、次第びきに、ぐるぐるぐる。……幕へ衝（つ）と消える時は、何ものか居て、操りの糸を引手繰（ひったぐ）るように颯（さっ）と隠れた。

筵舞台に残ったのは、青行燈（あおあんどん）と雪女。

悄（しお）れて、一人、ただうなだれているのであった。
上なる黒い布は、ひらひらと重くなった……空は化物どもが惣踊りに踊る頃から、次第に黒くなったのである。
美しい女（ひと）は、はずして、膝の上に手首に掛けた、薄色のショオルを取って、撫肩の頸（うなじ）に掛けて身繕い。
此方（こなた）に松崎ももう立とうとした。
青月代が、ひょいと覗（のぞ）いた。幕の隙間へ頤（あご）を乗せて、
「誰か、おい、前掛（まえかけ）を貸してくんな、」と見物を左右に呼んだ。
「前掛を貸しておくれよ、……よう、誰でも。」

美しい女(ひと)から、七八人小児(こども)を離れて、二人並んでいた子守の娘が、これを聞くと真先(まっさき)にあとじさりをした。言訳だけも赤い紐の前掛をしていたのは、その二人ぐらいなもので、……他は皆、横撫での袖とくいこぼしの膝、光るのはただ垢(あか)ばかり。

　傍(かたわら)から、また饂飩屋が出て舞台へ立った。

「これから女形(おんながた)が演処(しどころ)なんだぜ。居所がわりになるんだけれど、今度は亡者じゃねえよ、活(い)きてる娘の役だもの。裸では不可(いけね)えや、前垂(まえだれ)を貸しとくれよ。誰か、」

「後生(ごしょう)だってば、」

と青月代も口を添える。
子守の娘はまた退(しさ)った。
幼い達は妙にてれて、舞台の前で、土をいじッて俯向(うつむ)いたのもあるし、ちょろちょろ町の方へ立つのもあった。
「吝(しみた)れだなあ。」
饂飩屋がチョッ、舌打する。
「貸してくれってんだぜ、……きっと返すッてえに。……可哀相(かわいそう)じゃないか、雪女になったなりで裸で居ら。この、お稲さんに着せるんだよ。」
と青月代も前へ出て、雪女の背筋のあたりを冷たそ

うに、ひたりと叩いた……

「前掛でなくては。不可(いけな)いの？」

美しい人はすッと立った。

紳士は仰向(あおむ)いて、妙な顔色(かおつき)。

松崎の、うっかり帰られなくなったのは言うまでもなかろう。

十五

「兄さん、他(ほか)のものじゃ間に合わない？」

あきれ顔な舞台の二人に、美しい女(ひと)は親しげにそう

云った。

「他の物って、」と青月代は、ちょんぼり眉で目をぱちくる。

「羽織では。」

美しい女（ひと）は華奢（きゃしゃ）な手を衣紋（えもん）に当てた。

「羽織なら、ねえ、おい。」

「ああ、そんな旨（うめ）え事はねえんだけれど、前掛でさえ、しみったれているんだもの、貸すもんか。それだしね、羽織なんて誰も持ってやしませんぜ。」

と饂飩屋は吐出すように云う。成程、羽織を着たものは、ものの欠片（かけら）も見えぬ。

「可(よ)ければ、私のを貸してあげるよ。」

美しい女(ひと)は、言(ことば)の下に羽織を脱いだ、手のしないは、白魚が柳を潜(くぐ)って、裏は篝火(かがりび)がちらめいた、雁(かり)がねむすびの紋と見た。

「品子(しなこ)さん、」

紳士は留めようとして、ずッと立つ。

「可(い)いのよ、貴方(あなた)。」

と見返りもしないで、

「帯がないじゃないか、さあ、これが可いわ。」と一所に肩を辷(すべ)った、その白と、薄紫と、山が霞んだような派手な羅(うすもの)のショオルを落してやる……

雪女は、早く心得て、ふわりとその羽織を着た、黒縮緬(くろちりめん)の紋着(もんつき)に緋(ひ)を襲(かさ)ねて、霞を腰に、前へすらりと結んだ姿は、あたかも可(よ)し、小児(こども)の丈に裾(すそ)を曳(ひ)いて、振袖長く、影も三尺、左右に水が垂れるばかり、その不思議な媚(なまめか)しさは、貸小袖に魂が入って立ったとも見えるし、行燈の灯(ともし)を覆(おお)うた裲襠(かけ)の袂(たもと)に、蝴蝶(ちょうちょう)が宿って、夢が徜徉(さまよう)とも見える。

「難有(ありがと)う、」

「奥さん難有う。」

互に、青月代と饂飩屋が、仮髪(かつら)を叩いて喜び顔。

雪女の、その……擬(なぞら)えた……姿見に向って立つ後

姿を、美しい女（ひと）は、と視（なが）めて、

「島田も可（い）いこと、それなりで角かくしをさしたいようだわ……ああ、でも扱帯（しごき）を前帯じゃどう。遊女（おいらん）のようではなくって、」

「構わないの、お稲さんが寝衣（ねまき）の処だから、」

「ああ、ちょっと。」

と美しい女（ひと）が留める間に、聞かれた饂飩屋はツイと引込（ひっこ）む。

「あら、やっぱりお稲さん、お稲さんですわ、貴方。」

と言う。紳士を顧みた美しい女（ひと）の睫（まつげ）が動いて、目瞼（まぶた）が屹（きっ）と引緊（ひきしま）った。

「何、稲荷（いなり）だよ、おい、稲荷だろう。」
紳士も並んで、見物の小児（こども）の上から、舞台へ中折（なかおれ）を覗（のぞ）かせた。
「ねえ、この人の名は？……」
黒縮緬の雪女は、さすが一座に立女形（たておやま）の見識を取ったか、島田の一さえ、端然（きちん）と済まして口を利こうとしないので、美しい女（ひと）はまた青月代に、そう訊（き）いた。
「嵐お萩ッてえの……東西々々。」
と飜然（ひらり）と隠れる。
「芸名（げいみょう）ではない。役の娘の名を聞かしておくれ、何て云うの、よ、お前。」

と美しい女（ひと）は、やや急込（せきこ）んで言って、病身らしく胸を圧（おさ）えた。脱いだ羽織の、肩寒そうな一枚小袖の嬌娜姿（やさすがた）、雲を出（い）でたる月かと視（み）れば、離れた雲は、雪女に影を宿して、墨絵に艶（つや）ある青柳（あおやぎ）の枝。

春の月の凄（すご）きまで、蒼青（まっさお）な、姿見の前に、立直って、

「お稲です。」

と云って、ふと見向いた顔は、目鼻だち、水に朧（おぼろ）なものではなかった。

十六

舞台は居所がわりになるのだ、と楽屋のものが云った、――俳優（やくしゃ）は人に知らさないのを手際に化ものの踊るうち、俯向伏（うつむきふ）している間に、玉の曇（くもり）を拭（ぬぐ）ったらしい。……眉は鮮麗（あざやか）に、目はぱっちりと張（はり）を持って、口許（くちもと）の凜（りん）とした……やや強（きつ）いが、妙齢（としごろ）のふっくりとした、濃い生際（はえぎわ）に白粉（おしろい）の際立たぬ、色白な娘のその顔。

松崎は見て悚然（ぞっ）とした……

名さえ――お稲です――

肖（に）たとは迂哉（おろか）。今年如月（きさらぎ）、紅梅に太陽（ひ）の白き朝、同じ町内、御殿町（ごてんまち）あたりのある家の門を、内端（うちわ）な、しめやかな葬式（とむらい）になって出た。……その日は霜が消えな

かった——居周囲(いまわり)の細君女房連が、湯屋でも、髪結(かみゆい)でもまだ風説を絶(たや)さぬ、お稲ちゃんと云った評判娘にそっくりなのであった。

「私も今はじめて聞いて吃驚(びっくり)したの。」

その時、松崎の女房は、二階へばたばたと駈上(かけあが)り、御注進と云う処を、鎧(よろい)が縞(しま)の半纏(はんてん)で、草摺短(くさずりみじか)な格子の前掛、ものが無常だけに、卜手は飜(ひるがえ)さず、すなわち尋常に黒繻子(くろじゅす)の襟を合わせて、火鉢の向うへ中腰で細くなる……

髪も櫛巻(くしまき)、透切(すきぎ)れのした繻子の帯、この段何とも致方(いたしかた)がない。亭主、号が春狐であるから、名だけは

蘭菊（らんぎく）とでも奢（おご）っておけ。

春狐は小机を横に、座蒲団（ざぶとん）から斜（ななめ）になって、

「へーい、ちっとも知らなかった。」

「私もさ……今ね、内の出窓の前に、お隣家（となり）の女房（かみ）さんが立って、通（とおり）の方を見てしくしく泣いていなさるから、どうしたんですって聞いたんです。可哀相に……お稲ちゃんのお葬式（ともらい）が出る所だって、他家（よそ）の娘（こ）でも最惜（いとし）くってしようがないって云うんでしょう。——そう云えば成程何だわね、この節じゃ多日（しばらく）姿を見なかったわね、よくお前さん、それ、あの娘（こ）が通ると云うと、箸をカチリと置いて出窓から、お覗（のぞ）きだっけがね。」

苦笑いで、春狐子。
「余計な事を言いなさんな、……しかし惜(おし)いね、ちょっとないぜ、ここいらには、あのくらいな一枚絵は。」
「うっかり下町にだってあるもんですか。」
「などと云うがね、お前もお長屋月並だ。……生きてるうちは、そうまでは讃(ほ)めない奴(やつ)さ、顔がちっと強(きつ)すぎる、何のってな。」
「ええ、それは廂髪(ひさしがみ)でお茶の水へ通ってた時ですわ。もう去年の春から、娘になって、島田に結ってからといったら、……そりゃ、くいつきたいようだったの。髪のいい事なんて、もっとも盛(さかり)も盛だけれども。」

「幾歳(いくつ)だ。」
「十九……明けてですよ。」
「ああ、」と思わず煙管(きせる)を落した。
「勿論、お婿さんは知らずらしいね。」
「ええ、そのお婿さんの事で、まあ亡くなったんですよ。」
はっと思い、
「や、自殺か。」
「おお吃驚(びっくり)した……慌てるわねえ、お前さんは。いいえ、自殺じゃないけれども、私の考えだと、やっぱり同一(おんなじ)だわ、自殺をしたのも。」

「じゃどうしたんだよ。」
「それがだわね。」
「焦(じれ)ったい女だな。」
「ですから静(しずか)にお聞きなさいなね、稲ちゃんの内じゃ、成りたけ内証(ないしょ)に秘(かく)していたんだそうですけれど、あの娘(こ)はね、去年の夏ごろから——その事で——狂気(きちがい)になったんですって。」
「あの、綺麗な娘(こ)が。」
「まったくねえ。」
と俯向(うつむ)いて、も一つ半纏の襟を合わせる。

十七

「妙齢(としごろ)で、あの容色(きりょう)ですからね、もう前(ぜん)にから、いろいろ縁談もあったそうですけれど、お極(きま)りの長し短しでいた処、お稲ちゃんが二三年前まで上っていなすった……でも年二季の大温習(おおざらい)には高台へ出たんだそうです……長唄のお師匠さんの橋渡しで。

家(うち)は千駄木辺で、お父さんは陸軍の大佐だか少将だか、それで非職(ひい)てるの。その息子さんが新しい法学士なんですって……そこからね、是非、お嫁さんに欲(ほし)いって言ったんですとさ。

途中で、時々顔を見合って、もう見合いなんか済んでるの。男の方は大変な惚方（ほれかた）なのよ。もっとも家同士、知合いというんでも何でもないんですから、口を利いたことなんて、そりゃなかったんでしょうけれど、ほんに思えば思わるるとやらだわね。」

半纏着の蘭菊は、指のさきで、火鉢の縁（ふち）へちょいと当って、

「お稲ちゃんの方でも、嬉しくない事はなかったんでしょう。……でね、内々その気だったんだって、……お師匠さんは云うんですとさ、――隣家（となり）の女房（かみ）さんの、これは談話（はなし）よ。」

まだ卒業前ですから、お取極(とりき)めは、いずれ学校が済んでからッて事で、のびのびになっていたんだそうですがね。

去年の春、お茶の水の試験が済むと、さあ、その翌日(あくるひ)にでも結納を取替わせる勢(いきおい)で、男の方から急込(せきこ)んで来たんでしょう。

けれども、こっちぢゃ煮切(にえき)らない、というのがね——あの、娘(こ)にはお母(つか)さんがありません。お父さんというのは病身で、滅多に戸外(そと)へも出なさらない、何でも中気か何からしいんです——後家さんで、その妹さん、お稲ちゃんには叔母に当る、お婆さんのハイカラが取

締って、あの娘（こ）の兄さん夫婦が、すっかり内の事を遣（や）っているんだわね。

その兄さんというのが、何とか云う、朝鮮にも、満洲とか、台湾にも出店のある、大（おおき）な株式会社に、才子で勤めているんです。

その何ですとさ、会社の重役の放蕩息子（どらむすこ）が、ダイヤの指輪で、春の歌留多（かるた）に、ニチャリと、お稲ちゃんの手を圧（おさ）えて、おお可厭（いや）だ。」

と払う真似して、

「それで、落第、もう沢山。」

「どうだか。」

「ほんとうですとも。それからそのニチャリが、」

「右のな、」

と春狐は、ああと歎息する。

「ええ、ぞっこんとなって、お稲ちゃんをたってと云うの、これには嫂(あによめ)が一はながけに乗ったでしょう。」

「極(きま)りでいやあがる。」

「大分、お芝居になって来たわね。」

「余計な事を言わないで……それから、」

「兄さんの才子も、やっぱりその気だもんですからね、いよいよという談話(はなし)の時、きっぱり兄さんから断ってしまったんですって――無い御縁とおあきらめ下さい、

か何かでさ。」

「その法学士の方をだな、――無い御縁が凄(すさま)じいや、てめえが勝手に人の縁を、頤(あご)にしゃぼん玉の泡沫(あぶく)を塗って、鼻の下を伸ばしながら横撫でに粧(めけ)やあがる西洋剃刀(かみそり)で切ったんじゃないか。」

「ねえ……鬱(ふさ)いでいましたとさ、お稲ちゃんは、初心(うぶ)だし、世間見ずだから、口へ出しては何にも言わなかったそうだけれど……段々、御飯が少くなってね、好(すき)なものもちっとも食べない。

その癖、身じまいをする事ったら、髪も朝に夕に撫でつけて、鬢(びん)の毛一筋こぼしていた事はない。肌着も

毎日のように取替えて、欠かさずに湯に入って、綺麗にお化粧をして、寝る時はきっと寝白粧（ねおしろい）をしたんですって。

　皓歯（しらは）に紅（べに）よ、凄（すご）いようじゃない事、夜が更けた、色艶（いろつや）は。

　そして二三度見つかりましたとさ。起返って、帯をお太鼓にきちんと〆（し）めるのを――お稲や、何をおしだって、叔母さんが咎（とが）めた時、――私はお母（つか）さんの許（とこ）へ行くの――

　そう云ってね、枕許（まくらもと）へちゃんと坐って、ぱっちり目を開けて天井を見ているから、起きてるのかと思うと、

現(うつつ)で正体がないんですとさ。思詰(おもいつ)めたものだわねえ。」

十八

「まだね。危いってないの。聞いても、ひやひやするのはね、夜中に密(そっ)と箪笥(たんす)の抽斗(ひきだし)を開けたんですよ。」

「法学士の見合いの写真?……」

「いいえ、そんなら可(い)いけれど、短刀を密(そっ)と持ったの、お母さんの守護刀(まもりがたな)だそうですよ……そんな身だしなみのあったお母さんの娘なんだから、お稲ちゃんの、あ

の、きりりとして……妙齢（としごろ）で可愛い中にも品の可（よ）かった事を御覧なさい。」

「余り言うのはよせ、何だか気を受けて、それ、床の間の花が、」

「あれ、」

と見向く、と朱鷺色（ときいろ）に白の透（すか）しの乙女椿（おとめつばき）がほつりと一輪。

熟（じっ）と視（み）たが、狭い座敷で袖が届く、女房は、くの字に身を開いて、色のうつるよう掌（てのひら）に据えて俯向（うつむ）いた。

隙間もる冷い風。

「ああ、四辻がざわざわする、お葬式（ともらい）が行くんですよ。」

と前掛の片膝、障子へ片手。
「二階の欄干（てすり）から見る奴（やつ）があるものか。見送るなら門（かど）へお出な。」
「止（よ）しましょう、おもいの種だから……」
と胸を抱いて、
「この一輪は蔭ながら、お手向（たむ）けになったわね。」と、鼻紙へ密（そっ）と置くと、冷い風に淡い紅（くれない）……女心はかくやらむ。
窓の障子に薄日が映（さ）した。
「じゃ死のうという短刀で怪我でもして、病院へ入ったのかい。」

「いいえ、それはもう、家中で要害が厳重よ。寝る時分には、切れものという切れものは、そっくり一つ所へ蔵（しま）って、錠（じょう）をおろして、兄さんがその鍵（かぎ）を握って寝たんだっていうんですもの。」

「ははあ、重役の忰（せがれ）に奉って、手繰りつく出世の蔓（つる）、お大事なもんですからな。……会社でも鍵を預る男だろう。あの娘の兄と云えば、まだ若かろうに何の真似だい。」

「お稲ちゃんは、またそんなでいて、しくしく泣き暮らしてでも、お在（いで）だったかと思うと、そうじゃないの……精々（せっせ）裁縫（おしごと）をするんですって。自分のものは、肌の

ものから、足袋まで、綺麗に片づけて、火熨斗(ひのし)を掛けて、ちゃんと蔵(しま)って、それなり手を通さないでも、もののの十日も経(た)つと、また出して見て洗い直すまでにして、頼まれたものは、兄さんの嬰児(あかんぼ)のおしめさえ折りめの着くほど洗濯してさ。」

「おやおや、兄の嬰児(あかんぼ)の洗濯かね。」

「嫂(あによめ)というのが、ぞろりとして何にもしやしませんやね。またちょっとふめるんだわ。そりゃお稲ちゃんの傍(そば)へは寄附(よッつ)けもしませんけれども。それでもね、妹が美しいから負けないようにって、——どういう了簡(りょうけん)ですかね、兄さんが容色(きりょう)望みで娶(と)ったっていう

んですから……
小児(こども)は二人あるし、家(うち)は大勢だし、小体(こてい)に暮していて、別に女中ってても居ないんですもの、お守(も)りから何から、皆(みんな)、お稲ちゃんがしたんだわ。」
「ははあ、その児だ……」
ともすると、——それが夕暮が多かった——嬰児(あかんぼ)を背負(おぶ)って、別にあやすでもなく、結いたての島田で、夕化粧したのが、顔をまっすぐに、清(すずし)い目を瞻(みは)って、蝙蝠(こうもり)も柳も無しに、何を見るともなく、熟(じっ)と暮れかかる向側(むこうがわ)の屋根を視(なが)めて、其家(そこ)の門口(かどぐち)に彳(たたず)んだ姿を、松崎は両三度、通りがかりに見た事がある。

面影は、その時の見覚えで。

出窓の硝子越に、娘の方が往かえりの節などは、一体傍目も触らないで、竹をこぼるる露のごとく、すいすいと歩行く振、打水にも褄のなずまぬ、はで姿、と思うばかりで、それはよくは目に留まらなかった。

が、思い当る……葬式の出たあとでも、お稲はその身の亡骸の、白い柩で行く状を、あの、門に一人立って、さも恍惚と見送っているらしかった。

十九

女房は語（かたり）続けた——

「お稲ちゃんが、そんなに美しく身のまわりの始末をしたのも、あとで人に見られて恥かしくないように躾（たしな）んでいたんだわね——そして隙さえあれば、直ぐに死ぬ気で居たんでしょう、寝しなにお化粧をするのなんか。

ですから、病院へ入ったあとで、針箱の抽斗（ひきだし）にも、畳紙（たとうがみ）の中にも、皺（しわ）になった千代紙一枚もなく……油染（あぶらじ）みた手柄一掛（ひとかけ）もなかったんですって。綺麗にしておいたんだわ……友達から来た手紙なんか、中には焼いたのもあるんですって、……心掛けたじゃありませ

んか。惜(おし)まれる娘(こ)は違うわね。

ぐっと取詰(とりつ)めて、気が違った日は、晩方、髪結(かみゆい)さんが来て、鏡台に向っていた時ですって。夏の事でね、庭に紫陽花(あじさい)が咲いていたせいか、知らないけれど、その姿見の蒼(あお)さったら、月もささなかったたって云うんですがね。――そして、お稲ちゃんのその時の顔ぐらい、色の白いって事は覚えないんですとさ――

髪結さんが、隣家(となり)の女房(かみさん)へ談話(はなし)なんです。

同一(おなじ)のが廻りますからね。

隣家(となり)と、お稲ちゃん許(とこ)と、同一(おなじ)のは、そりゃ可(い)いけれど、まあ、飛んでもない事……その法学士さんの家(うち)

が、一つ髪結さんだったんでしょう。だもんだから、つい、その頃、法学士さんに、余所からお嫁さんが来て、……箱根へ新婚旅行をして帰った日に頼まれて行って、初結いをしたって事を……可ござんすか……お稲ちゃんの島田を結いながら、髪結さんが話したんです。」

「ああ、悪い。」

と春狐は聞きながら、眉を顰めた。

同じように、打顰んで、蘭菊は、つげの櫛で鬢の毛を、ぐいと撫でた。

「……気を附けないと……何でも髪結さんが、得意先

の女の髪を一条（ひとすじ）ずつ取って来て、内証（ないしょ）で人のと人のと結び合わせて蔵（しま）っておいて御覧なさい。世間は直ぐに戦争（いくさ）よりは余計乱れると、私、思うんですよ。

お稲さんは黙って俯向（うつむ）いていたんですって。左挿しに、毛筋を通して銀の平打（ひらうち）を挿込んだ時、先が突刺（つっささ）りやしないかと思った。はっと髪結さんが抜戻した発奮（はずみ）で、飛石へカチリと落ちました。……

――口惜（くや）しい――とお稲ちゃんが言ったんですって。根揃（ねぞろ）え自慢で緊（し）めたばかりの元結（もっとい）が、プッツリ切れ、背中へ音がして颯（さっ）と乱れたから、髪結さんは尻餅をつ

きましたとさ。
でも、髪結さんは、あの娘の髪の事ばかり言って惜がってるそうですよ。あんな、美しい、柔軟な、艶の可い髪は見た事がないってね、――死骸を病院から引取る時も、こう横に抱いて、看護婦が二人で担架へ移そうとすると、背中から、ずッとかかって、裾よりか長うござんしたって……ほんとうに丈にも余るというんだわね。」
「ああ……聞いても惜い……何のために、髪までそんなに美しく世の中へ生れて来たんだ。」
春狐は思わず、詰るがごとく急込んで火鉢を敲いた。

「ねえ、私にだって分りませんわ。」

「で、どうしたんだい。」

「お稲ちゃんは、髪を結った、その時きり、夢中なの。別に駈出(かりだ)すの、手が掛(かか)るのって事はなかったんだそうですけれど、たださえ細った食が、もうまるっきり通りますまい。

賺(すか)しても、叱っても。

しようがないから、病院へ入れたんです。お医者さんも初(はじめ)から首をお傾(ま)げだったそうですよ。

まあね。それでも出来るだけ手当をしたにはしたそうだけれど、やっぱり、……ねえ……おとむらいになっ

てしまって――」

と薄（うっす）りした目のうちが、颯（さっ）とさめると、ほろりとする。

二十

春狐は肩を聳（そびや）かした。

「なったんじゃない……葬式（ともらい）にされたんだ。殺されたんだよ。だから言わない事じゃない、言語道断だ、不埒（ふらち）だよ。妹を餌（えさ）に、鰌（どじょう）が滝登りをしようなんて。」

「ええ、そうよ……ですからね、兄って人もお稲ちゃ

んが病院へ入って、もう不可（いけ）ないっていう時分から、酷（ひど）く何かを気にしてさ。嬰児（あかんぼ）が先に死ぬし、それに、この葬式（ともらい）の中だ、というのに、嫂（あによめ）だわね、御自慢の細君が、またどっと病気で寝ているもんだから、ああ稲がとりに来たとりに来たって、蔭ではそう云っていますとさ。」

「待っていた、そうだろう。その何だ、ハイカラな叔母なんぞを血祭りに、家中鏖殺（みなごろし）に願いたい。ついでにお父さんの中気だけ治してな。」と妙に笑った。

「まあ、」

と目を睜（みは）って、

「串戯（じょうだん）じゃないわ、人の気も知らないで。」
「無論、串戯ではないがね、女言濫（みだ）りに信ずべからず、半分は嘘だろう。」
「いいえ！」
「まあさ、お前の前だがね、隣の女房（かみさん）というのが、また、とかく大袈裟（おおげさ）なんですからな。」
「勝手になさいよ、人に散々饒舌（しゃべ）らしといて、嘘じゃないわ。ねえ、お稲ちゃん、女は女同士だわね。」
と乙女椿に頬摺（ほおず）りして、鼻紙に据えて立つ……
実はそれさえ身に染みた。
床の間にも残ったが、と見ると、蕾（つぼみ）の堅いのと、

幽に開いた二輪のみ。

「ちょっと、お待ち。」

「何、」と襖に手を掛ける。

「でも、少し気になるよ、肝心、焦れ死をされた、法学士の方は、別に聞いた沙汰なしかい。」

「先方でもね、お稲ちゃんがその容体だってのを聞いて、それはそれは気の毒がってね——法学士さんというのが、その若い奥さんに、真になって言ったんだって——お前は二度目だ。後妻だと思ってくれ。お稲さんとは、確に結婚したつもりだって——」

春狐はふと黙ってそれには答えず……

「ああ、その椿は、成りたけ川へ。」

「流しましょうね、ちょっと拝んで、」

と二階を下りる[#「と二階を下りる」は底本では「「と二階を下りる」]、……その一輪の朱鷺色（ときいろ）さえ、消えた娘の面影に立った。

が、幻ならず、最も目に刻んで忘れないのは、あの、夕暮を、門（かど）に立って、恍惚（うっとり）空を視（なが）めた、およそ宇宙の極まる所は、艶やかに且つ黒きその一点の秘密であろうと思う、お稲の双の瞳であった。

同じその瞳である。同じその面影である。……

――お稲です――

と云って、振向いた時の、舞台の顔は、あまつさえ、凝（なぞら）えたにせよ、向って姿見の真蒼（まっさお）なと云う行燈（あんどん）があろうではないか。

美しい女（ひと）は屹（き）と紳士を振向いた。

「貴方（あなた）。」

若い紳士は、杖（ステッキ）を小脇に、細い筒袴（ずぼん）で、伸掛（のしかか）って覗（のぞ）いて、

「稲荷だろう、おい、狐が化けた所なんだろう。」と中折（なかおれ）の廂（ひさし）で押（おし）つけるように言った。

羽織に、ショオルを前結び。またそれが、人形に着せたように、しっくりと姿に合って、真向（まんむ）きに直った

顔を見よ。

「いいえ、私はお稲です。」

紳士は、射られたように、縁台へ退（さが）った。

美しい女の褄（つま）は、真菰（まこも）がくれの花菖蒲（はなあやめ）、で、すらりと筵（むしろ）の端に掛（かか）った……

「ああ、お稲さん。」

と、あたかもその人のように呼びかけて、

「そう。そして、どうするの。」

お稲は黙って顔を見上げた。

小さなその姿は、ちょうど、美しい女（ひと）が、脱いだ羽織をしなやかに、肱（ひじ）に掛けた位置に、なよなよとして

見える。
「止せ！品子さん。」
「可いわ。」
「見っともないよ。」
「私は構わないの。」

二十一

「ねえ、お稲さん、どうするの。」
とまた優しく聞いた。
「どうするって、何、小母さん。」

役者は、ために羽織を脱いだ御贔屓（ごひいき）に対して、舞台ながらもおとなしい。

「あのね、この芝居はどういう脚色（しくみ）なの、それが聞きたいの。」

「小母さん見ていらっしゃい。」

と云った。

その間（うち）も、縁台に掛けたり、立ったり、若い紳士は気が気ではなさそうであった。

「おい、もう帰ろうよ、暗くなった。」

雲にも、人にも、松崎は胸が轟（とどろ）く。

「待ってて下さい。」

と見返りもしないで、

「見ますよ、見るけれどもね、ちょっと聞かして下さいな。ね、いい児（こ）だから。」

「だって、言ったって、芝居だって、同一（おなじ）なんですもの、見ていらっしゃい。」

「急ぐから、先へ聞きたいの、ええ、不可（いけな）い。」

お稲は黙って頭（かぶり）を掉（ふ）る。

「まあ、強情だわねえ。」

「強情ではござりませぬ。」

と思いがけず幕の中から、皺（しわ）がれた声を掛けた。美しい女（ひと）は瞳を注いだ、松崎は衝（つ）と踏台を離れて立った。

——その声は見越入道が絶句した時、——紅蓮大紅蓮とつけて教えた、目に見えぬものと同一であった。

「役者は役をしますのじゃ。何も知りませぬ。貴女がお急ぎであらばの、衣裳をお返し申すが可い。」

と半ば舞台に指揮をする。

「いいえ、羽織なんか、どうでも可いの、ただ私、気になるんです。役者が知らないなら、誰でも構いません。差支えなかったら聞かして下さい。一体ここはどこなんです。」

「六道の辻の小屋がけ芝居じゃ。」

と幕が動くように向うで言った。

松崎は、思わず紳士と目を見合った。小児（こども）なぞは眼中にない、男は二人のみだったから。

美しい女（ひと）は、かえって恐れげもなくこう言った。

「ああ、分りました、そしてお前さんは？」

「いろいろの魂を瓶（かめ）に入れて持っている狂言方じゃ。たって望みならば聞かせようかの。」

「ええ、どうぞ。」

と少々（わかわか）しいのが、あわれに聞えた。

「そこへ……髪結（かみゆい）が一人出るわいの。」

松崎は骨の硬くなるのを知ったのである。

「それが、そのお稲の髪を結うわいの。髪結の口から

の、若い男と、美しい女と、祝言して仲の睦じい話をするのじゃ。

その男というのはの、聞かっしゃれ、お稲の恋じゃわいの、命じゃわいの。

もうもう今までとてもな、腹の汚い、慾に眼の眩んだ、兄御のために妨げられて、双方で思い思うた、繋がる縁が繋がれぬ、その切なさで、あわれや、かぼそい、白い女が、紅蓮、大紅蓮、……」

ああ、可厭な。

「阿鼻焦熱の苦悩から、手足がはり、肉を切こまざいた血の池の中で、悶え苦んで、半ば活き、半ば死んで、

生きもやらねば死にも遣(や)らず、死にも遣らねば生きも遣らず、呻(うめ)き悩んでいた所じゃ。

また万に一つもと、果敢(はかな)い、細い、蓮(はす)の糸を頼んだ縁は、その話で、鼠の牙(きば)にフッツリと食切られたが、……

ドンと落ちた穴の底は、狂気(きちがい)の病院入(いり)じゃや。この段替ればいの、狂乱の所作(しょさ)じゃぞや。」

と言う。風が添ったか、紙の幕が、煽(あお)つ――煽つ。お稲は言(ことば)につれて、すべて科(しぐさ)を思ったか、振(ふり)が手にうっかり乗って、恍惚(うっとり)と目を瞶(みは)った。……

二十二

「どうするの、それから。」

細い、が透る、力ある音調である。美しい女のその声に、この折から、背後のみ見返られて、雲のひだ染みに蔽いかかる、桟敷裏とも思う町を、影法師のごとくようやく人脚の繁くなるのに気を取られていた、松崎は、また目を舞台に引附けられた。

舞台を見返す瞬間、むこうから、先刻の編笠を被った鴉ような新粉細工が、ふと身を起して、うそうそと出て来るのを認めた。且つそれが、古綿のようにむく

むくと、雲の白さが一団（ひとかたまり）残って、底に幽（かすか）に蒼空（あおぞら）の見える……遥（はる）かに遠い所から、たとえば、ものの一里も離れた前途（さき）から、黒雲を背後（うしろ）に曳（ひ）いて襲（おそ）い来るごとく見て取られた。

それ、もうそこに、編笠を深く、舞台を覗（のぞ）く。

いつの間にか帰って来て、三人に床几（しょうぎ）を貸した古女房も交って立つ。

彼処（かしこ）に置捨てた屋台車が、主（ぬし）を追うて自ら軋（きし）るかと、響（ひびき）が地を畝（うね）って、轟々（ごろごろ）と雷（らい）の音。絵の藤も風に颯（さっ）と黒い。その幕の彼方（かなた）から、紅蓮、大紅蓮のその声、舌も赤う、ひらめくと覚えて、めらめらと饒舌（しゃべ）る。……

「まだ後が聞きとうござりますか。お稲は狂死(くるいじに)に死ぬるのじゃ。や、じゃが、家眷親属(うからやから)の余所(よそ)で見る眼(まなこ)には、鼻筋の透った、柳の眉毛、目を糸のように、睫毛(まつげ)を黒う塞(ふさ)いで、の、長煩らいの死ぬ身には塵(ちり)も据(すわ)らず、色が抜けるほど白いばかり。さまで痩(や)せもせず、苦患(くげん)も無しに、家眷息絶ゆるとは見たれども、の、心の裡(うち)の苦痛(くるしみ)はよな、人の知らぬ苦痛はよな。その段を芝居で見せるのじゃ。」

「そして、後は、」

と美しい女(ひと)は、白い両手で、確(しか)と紫の襟を圧(おさ)えた。

「死骸になっての、空蟬(うつせみ)の藻脱けた膚(はだ)は、人間の手を

離れて牛頭馬頭の腕に上下から摑まれる。や、そこを見せたい。その娘の仮髪ぢゃ、お稲の髪には念を入れた。……島田が乱れて、糸も切もかからぬ膚を黒く輝く、吾が天女の後光のように包むを見さい。末は踵に余って曳くぞの。

　鼓草の花の散るように、娘の身体は幻に消えても、その黒髪は、金輪、奈落、長く深く残って朽ちぬ。百年、千歳、失せず、枯れず、次第に伸びて艶を増す。その髪千筋一筋ずつ、獣が食えば野の草から、鳥が啄めば峰の花から、同じお稲の、同じ姿容となって、一人ずつ世に生れて、また同一年、同一月日に、親兄弟、家

眷親属、己(おの)が身勝手な利慾(りよく)のために、恋をせかれ、情(なさけ)を破られ、縁を断(き)られて、同一(おなじ)思いで、狂死(くるいじに)するわいの。あの、厄年の十九を見され、五人、三人一時(いっとき)に亡(う)せるじゃろうがの。死ねば思いが黒髪に残ってその一筋がまた同じ女と生れる、生きかわるわいの。死にかわるわいの。

その誰もが皆揃うて、親兄弟を恨む、家眷親属を恨む、人を恨む、世を恨(うら)む、人間五常の道乱れて、黒白(あやめ)も分かず、日を蔽(おお)い、月を塗る……魔道の呪詛(のろい)じゃ、何と！　魔の呪詛を見せますのじゃ、そこをよう見さっしゃるが可(い)い。

お稲の髪の、乱れて靡(なび)く処をのう。」

「死んだお稲さんの髪が乱れて……」

と美しい女(ひと)は、衝(つ)と鬢(びん)に手を遣ったが、ほつれ毛よりも指が揺(ゆら)いで、

「そして、それからはえ？」

と屹(きっ)と言う

「此方(こなた)、親があらば叱らさりょう。よう、それからと聞きたがるの、根問(ねど)いをするのは、愛嬌(あいきょう)が無うてようないぞ。女子(おなご)は分けて、うら問い葉問(はどい)をせぬものじゃ。」

雲の暗さが増すと、あたりに黒く艶が映(さ)す。

その中に、美しい女(ひと)は、声も白いまで際立って、

「いいえ、聞きたい。」

二十三

「たって聞きたくばの、こうさしゃれ。」

幕の蔭で、間(ま)を置いて、落着いて、

「お稲の芝居は死骸の黒髪の長いまでじゃ。ここでは知らぬによって、後は去(い)んで、二度添(ぞい)どのに聞かっしゃれ、二度添いの女子(おなご)に聞かっしゃれ。」

「二度添とは？　何です、二度添とは。」

扱帯（しごき）を手繰るように繰返して問返した。
「か、知らぬか、のう。二度添とはの、二度目の妻の事じゃ。男に取替えられた玩弄（おもちゃ）の女子（おなご）じゃ。古い手に摘まれた、新しい花の事いの。後妻（うわなり）じゃ、後妻（ごさい）と申しますものじゃわいのう。」
ト一度引（ひっ）かかったように見えたが、ちらりと筵（むしろ）の端を、雲の影に踏んで、美しい女（ひと）の雪なす足袋は、友染凄（すご）く舞台に乗った。
目を明（あきら）かに凝（じっ）と視（み）て、
「その後妻とは、二度添とは誰れ、そこに居る人。」と肩を斜め、手を、錆（さ）びたが楯（たて）のごとく、行燈（あんどん）に確（しか）と置

く。
「おおお、誰や知らぬ、その二度添というのはの、……お稲が望(のぞみ)が遂げなんだ、縁の切れた男に、後で枕添(まくらぞえ)となった女子(おなご)の事いの。……娑婆(しゃば)はめでたや、虫の可(い)い、その男はの、我が手で水を向けて、娘の心を誘うておいて、弓でも矢でも貫こう心はなく、先方(さき)の兄者に、ただ断り言われただけで指を銜(くわ)えて退(すさ)ったいの、その上にの。
我勝手(われがって)や。娘がこがれ死(じに)をしたと聞けば、おのれが顔をかがみで見るまで、自惚(うぬぼ)れての。何と、早や懐中(ふところ)に抱いた気で、お稲はその身の前妻じゃ。——

との、まだお稲が死なぬ前に、ちゃッと祝言した花嫁御寮に向うての、——お主(ぬし)は後妻じゃ、二度目ぢゃと思うておくれい、——との。何と虫が可(よ)かろうが。その芋虫にまた早や、台(うてな)も蕊(しべ)も嘗(な)められる、二度添どのもあるわいの。」

と言うかと思う、声の下で、

「ほほほほほ」

と口紅がこぼれたように、散って舞うよと花やかに笑った。

ああ、膚(はだ)が透く、心が映る、美しい女(ひと)の身の震う影が隈(くま)なく衣(きぬ)の柳条(しま)に搦(から)んで揺れた。

「帰ろう、品子、何をしとる。」
紳士はずかずかと寄って、
「詰(つま)らん、さあ、帰るんです、帰るんだ。」
とせり着くように云ったが、身動きもしないのを見て、堪(たま)りかねた体(てい)で、ぐいと美しい女(ひと)の肩を取った。
「帰らんですか、おい、帰らんのか。」
その手は衝(つ)と袖で払われた。
「貴方(あなた)は何です。女の身体(からだ)に、勝手に手を触って可(い)いんですか。他人の癖に、……」
「何だ、他人とは。」
憤気(むき)になると、……

「舞台へ、靴で、誰、お前は。」
先刻（さっき）から、ただ柳が枝垂（しだ）れたように行燈に凭（もた）れていた、黒紋着（くろもんつき）のその雪女が、りんとなって、両手で紳士の胸を圧（お）した。

トはっとした体（てい）で、よろよろと退（しさ）ったが、腰も据らず、ひょろついて来て縋（すが）るように寄ったと思うと、松崎は、不意にギクと手首を持たれた。

「貴方（あなた）を、伴侶（つれ）、伴侶と思います。あ、あ、あの、楽屋の中が、探険、……」

紳士は探険と言った。

「た、た、探険したい。手を貸して下さい。御、御助

力が願いたい。」

「それはよくない。不可ませんみだりに芝居の楽屋へ入るものではないんです。」

「そ、そんなら、妻を――人の見る前、夫が力ずくでは見っともない。貴方、連出して下さい、引張出して下さい、願います。僕を、他人だなんて僕を、……妻は発狂しました。」

二十四

「いいえ、御心配には及びません。」

松崎は先んじられた……そして美しい女（ひと）は、淵（ふち）の測り知るべからざる水底（みなそこ）の深き瞳を、鋭く紳士の面（おもて）に流して

「私は確（たしか）です。発狂するなら貴方がなさい、御令妹（ごれいまい）のお稲さんのために。」

と、爽（さわや）かに言った。

「私とは、他人なんです。」

「他人、何だ、何だ。」

と喘（あえ）ぐ、

「ですが、私に考えがあって、ちょっと知己（ちかづき）になっていたばかりなんです。」

美しい女（ひと）は、そんなものは、と打棄（うっちゃ）る風情で、屹（き）とまた幕に向って立直った。

「そこに居る人……お前さんは不思議に、よく何か知っておいでだね、地獄、魔界の事まで御存じだね。豪（えら）いのね。でも悪魔、変化（へんげ）ばかりではない、人間にも神通（じんずう）があります。私が問うたら、お前さんは、去（い）って聞けと言いましたね。

私は即座に、その二度添（ぞい）、そのうわなり、その後妻に、今ここで聞きました。……

お稲さんが亡くなってから、あとのその後妻の芝居を、お前さんに聞かせましょうか。聞かせましょうか。

それともお前さんは御存じかい。」

幕の内で、

「朧気（おぼろげ）じゃ、冥土（めいど）の霧で朧気じゃ。はっきりした事を聞きたいのう。」

「ええ、聞かしてあげましょう。——男に取替えられた玩弄（おもちゃ）は、古い手に摘まれた新しい花は、はじめは何にも知らなかったんです。清い、美しい、朝露に、旭（あさひ）に向って咲いたのだと人なみに思っていました。ですが、蝶が来て、一所に遊ぶ間もなかったんです。

お稲さんの事を聞かされました。玩弄（おもちゃ）は取替えられたんです、花は古い手に摘（つま）れたんです……男は、潔い

白い花を、後妻になれと言いました。

贅沢（ぜいたく）です、行過ぎています。思った恋をし遂げないで、引込んだら断念めれば可（い）い、そのために恋人が、そうまでにして生命（いのち）を棄てたと思ったら、自分も死ねば可（い）いんです。死なれなければ、死んだ気になって、お念仏を唱えていれば可いんです。

力が、男に足りないで、殺させた女を前妻だ、と一人極（ぎ）めにして、その上に、新妻（にいづま）を後妻になれ、後妻にする、後妻の気でおれ、といけ洒亜々々（しゃあしゃあ）として、髪を光らしながら、鰌髭（どじょうひげ）の生えた口で言うのは何事でしようね。」

「いよいよ発狂だ、人の前で見っともない。」

紳士は肩で息をした、その手は松崎に縋(すが)っている。

……

「ええ、人の前で、見っともないと云って、ここには幾多(いくたり)居ます。指を折って数えるほどもない。夫が私を後妻にしたのは、大勢の前、世間の前、何千人、何万人の前だか知れません。

　夫も夫、お稲さんの恋を破った。そこにおいでの他人も他人、皆(みんな)、女の仇(かたき)です。

　幕の中の人、お聞きなさい。

二度添にされた後妻はね……それから夫の言(ことば)に、

わざと喜んで従いました。

涙を流して同情して、いっそ、後妻と云うんなら、お稲さんの妹分になって、お稲さんにあやかりましょう。そのうまれ代わりになりましょう、と云って、表向きつてを求めて、お稲さんの実家に行って、そして私を——その後妻を——兄さんの妹分にして下さい、と言ったんです。

そこに居る他人は、涙を流して喜びました。もっとも、そこに居るようなハイカラさんは、少い女が、兄さん、とさえ云ってやれば、何でも彼でも涙を流すに極っています。

私は精々(せっせ)と出入(ではい)りしました。先方(さき)からも毎日のように来るんです。そして兄さん、兄さんと、云ううちには、きっと袖を引くに極(きま)っているんです。しかも奥さんは永々の病気の処、私はそれが望みでした。」

電(いなびかり)が、南辻橋、北の辻橋、菊川橋、撞木(しゅもく)橋、川を射て、橋に輝くか、と衝(つ)と町を徹(とお)った。

二十五

「その望みが叶(かな)ったんです。

そして、今日も、夫婦のような顔をして、二人づれ

で、お稲さんの墓参りに来たんです——夫は、私がこうするのを、お稲さんの霊魂が乗りうつったんだと云って、無性に喜んでいるんです。

殺した妹の墓の土もまだ乾かないのに、私と一所に、墓参りをして、御覧なさい、裁下ろしの洋服の襟に、乙女椿の花を挿して、お稲は、こういう娘だったと、平気で言います。

その気ですからね。」

紳士の身体は靴を刻んで、揺上がるようだったが、ト松崎が留めたにもかかわらず、かッと握拳で耳を圧えて、横なぐれに倒れそうになって、たちまち射る

がごとく町を飛んだ。その状（さま）は、人の見る目に可笑（おかし）くあるまい、礫（つぶて）のごとき大粒の雨。

雨の音で、寂寞（ひっそり）する、と雲にむせるように息が詰（つま）った。

「幕の内の人、」

美しい女（ひと）は、吐息（といき）して、更（あらた）めて呼掛けて、

「お前さんが言った、その二度添いの談話（はなし）は分ったんですか。」

「それから、」

と雨に濡れたような声して言う。

「これが知れたら、男二人はどうなります。その親兄

弟は？　その家族はどうなると思います。それが幕なのです。」

「さて、その後（あと）はどうなるのじゃ。」

「あら、……」

もどかしや。

「お前さんも、根問（ねどい）をするのね。それで可（い）いではありませんか。」

「いや、可（よ）うないわいの、まだ肝心な事が残ったぞ。」

「肝心な事って何です。」

「はて、此方（こなた）も、」

雨に、つと口を寄せた気勢（けはい）で、

「知れた事じゃ……肝心のその二度添(ぞい)どのはどうなるいの。」
聞くにも堪えじ、と美しい女(ひと)の眦(まなじり)が上(あが)った。
「ええ、廻りくどい！　私ですよ。」
と激した状(さま)で、衝(つ)と行燈(あんどん)を離れて、横ざまに幕の出入口に寄った。流るるような舞台の姿は、斜めに電光(いなびかり)に颯(さっ)と送られた。……
「分っているがの。」
と鷹揚(おうよう)に言って、
「さてじゃ、此方(こなた)の身は果(はて)はどうなるのじゃ。」
「…………」

ふと黙って、美しい女（ひと）は、行燈に、しょんぼりと残ったお稲の姿にその眦（まなじり）を返しながら、

「お前さんの方の芝居は？　この女はどうなる幕です。」

「おいの、……や、紛れて声を掛けなんだじゃで、お稲は殊勝気（けなげ）に舞台じゃった。――雨に濡りように……折角の御見物じゃや、幕切れだけ、ものを見しような。」

と言うかと思うと、唐突（だしぬけ）にどろどろと太鼓が鳴った。音を綯交（なえま）ぜに波打つ雷（らい）鳴る。

猫が一疋と鼬（いたち）が出た。

ト無慙（むざん）や、行燈の前に、仰向（あおむ）けに、一個（ひとつ）が頭（つむり）を、

一個(ひとつ)が白脛(しらはぎ)を取って、宙に釣ると、綰(わが)ねの緩んだ扱帯(しごき)が抜けて、紅裏(もみうら)が肩を辷(すべ)った……雪女は細(ほっそ)りとあからさまになったと思うと、すらりと落した、肩なぞえの手を枕に、がっくりと頸(うなじ)が下(さが)って、目を眠った。その面影に颯(さっ)と影、黒髪が丈(たけ)に乱れて、舞台より長く敷いたのを、兇悪異変な面(つら)二つ、ただ面(めん)のごとく行燈より高い所を、ずるずると引いて、美しい女(ひと)の前を通る。

　幕に、それが消える時、風が擲(なげう)つがごとく、虚空から、——雨交りに、電光の青き中を、朱鷺色(ときいろ)が八重に縫う乙女椿の花一輪。はたと幕に当って崩れもせず……お稲の玉なす胸に留まって、たちまち隠れた。

美しい女(ひと)は筵(むしろ)に爪立(つまだ)って身悶(みもだ)えしつつ、

「お稲さんは、お稲さんは、これからどうなるんです、どうなるんです。」

「むむ、くどいの、あとは魔界のものじゃ。雪女となっての、三つ目入道、大入道の、酌なと伽(とぎ)なとしょうぞいの。わはは、」

　と笑った。

美しい女(ひと)は、額を当てて、幕を掴(つか)んで、

「生意気な事をお言いでない。幕の中の人、悪魔、私も女だよ、十九だよ……お稲さんと同じ死骸になるんだけれど、誰が、誰が、酌なんか、……可哀相にお稲

さんを——女はね、女はね、そんな弱いものじゃない。私を御覧。」

はたた、はたた神。

南無三宝（なむさんぽう）、電光に幕あるのみ。

「あれえ。」と聞えた。

瞬間、松崎は猶予（ためら）ったが、棄ておかれぬのは、続いて、編笠した烏と古女房が、衝（つ）と幕を揚げて追込んだ事である。

手を掛けると、触るものなく、篠（しの）つく雨の簾（すだれ）が落ちた。

と見ると、声のしたものは何も見えない。三つ目入

道、狐、狸、猫も鼬もごちゃごちゃと小さく固まっていたが、松崎の殺進に、気を打たれたか、ばらばらと、奥へ遁(に)げる。と果(はて)しもなく野原のごとく広い中に、塚を崩した空洞(うつろ)と思う、穴がぽかぽかと大(おおき)く窪(くぼ)んで蜂の巣を拡げたような、その穴の中へ、すぽん、と一個(ひとつ)ずつ飛込んで、ト貝鮹(かいだこ)と云うものめく……頭だけ出して、ケラケラと笑って失(う)せた。

　何等の魔性ぞ。這奴(しゃつ)等が群り居た、土間の雨に、引挘(ひきむし)られた衣(きぬ)の綾(あや)を、驚破(すわ)や、蹂躙(ふみにじ)られた美しい女(ひと)かと見ると、帯ばかり、扱帯(しごき)ばかり、花片(はなびら)ばかり、葉ばかりぞ乱れたる。

途端に海のような、真昼を見た。

広場は荒廃して日久しき染物屋らしい。縦横（たてよこ）に並んだのは、いずれも絵の具の大瓶（おおがめ）である。

あわれ、その、せめて紫の瓶なれかし。鉄のひびわれたごとき、遠くの壁際の瓶の穴に、美しい女（ひと）の姿があった。頭（つむり）を編笠が抱えた、手も胸も、面影も、しろしろと、あの、舞台のお稲そのままに見えたが、ただ既に空洞（うつほ）へ入って、底から足を曳（ひ）くものがあろう、美しい女（ひと）は、半身を上に曲げて、腰のあたりは隠れたのである。

雪のような胸には、同じ朱鷺色（ときいろ）の椿がある。

叫んで、走りかかると、瓶の区劃（しきり）に躓（つまず）いて倒れた手に、はっと留南奇（とめき）して、ひやひやと、氷のごとく触ったのは、まさしく面影を、垂れた腕（かいな）にのせながら土間を敷いて、長くそこまで靡（なび）くのを認めた、美しい女（ひと）の黒髪の末なのであった。

この黒髪は二筋三筋指にかかって手に残った。

海に沈んだか、と目に何も見えぬ。

四ツの壁は、流るる電（いなびかり）と輝く雨である。とどろとどろと鳴るかみは、大灘（おおなだ）の波の唸（うな）りである。

「おでんや――おでん。」

戸外（おもて）を行（ゆ）く、しかも女の声。

我に返って、這（は）うように、空屋の木戸を出ると、雨上りの星が晃々（きらきら）。

後で伝え聞くと、同一（おなじ）時、同一（おなじ）所から、その法学士の新夫人の、行方の知れなくなったのは事実とか。……松崎は実は、うら少（わか）い娘の余り果敢（はか）なさに、亀井戸詣（もうで）の帰途（かえるさ）、その界隈（かいわい）に、名誉の巫子（いちこ）を尋ねて、そのくちよせを聞いたのであった……霊の来（きた）った状（さま）は秘密だから言うまい。魂（たま）の上（あが）る時、巫子は、空（くう）を探って、何もない所から、弦（ゆんづる）にかかった三筋ばかりの、長い黒髪を、お稲の記念（かたみ）ぞとて授けたのを、とやせんとばかりで迷（まよい）の巷（ちまた）。

黒髪は消えなかった。

大正二（一九一三）年五月

底本：「泉鏡花集成６」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９６（平成８）年３月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十五巻」岩波書店
　　１９４０（昭和15）年９月20日発行
※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。
入力：門田裕志
校正：高柳典子
２００７年２月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。